

巻頭図版 大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡
伊賀寺地区



(1)火葬墓 S K03全景(南から)



(2)火葬墓 S K26全景(南東から)

3. 大山崎大枝線道路改良事業 関係遺跡発掘調査報告

1. はじめに

京都府を南北に連ねる交通路の整備が進められる中、大山崎町から長岡京市、京都市西部にかけては京都第二外環状道路の建設が計画されている。それに伴い、第二外環状道路周辺の道路整備が計画されており、その一環として、京都府は府道大山崎大枝線道路の改良事業を進めている。今回の調査は、京都府乙訓土木事務所の依頼により、府道大山崎大枝線道路の改良事業に伴い実施したものである。調査地点は、府道大山崎大枝線と京都第二外環状道路の接合部分の本調査地1か所(伊賀寺地区)、第二外環状道路内の試掘調査3か所(樽井地区・調子地区・円明寺地区)、計4か所である(第1図)。

本調査を実施した伊賀寺地区は、長岡京市下海印寺下内田地内にあり、長岡京跡右京七条三坊十二町(新条坊呼称で八条三坊十町：以下同じ)に位置し、伊賀寺遺跡内にある。調査対象地は小泉川氾濫源よりも1m近く高い段丘上であり、平成15年度に実施した第二外環状道路関係遺跡の



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部)

1.伊賀寺地区R943次 2.樽井地区 R943次 3.調子地区 R938次 4.円明寺地区R939・940次

試掘調査(右京第799次調査)により、縄文時代から弥生時代にかけての遺構が分布していることが判明していた。^(注1) 調査は、農業用水路・農道の確保の関係から、3か所のトレンチに分けて、計1,045㎡を長岡京跡右京第943次調査として実施した。現地調査期間は5月7日～7月30日までを要した。

試掘調査は、樽井地区と調子地区・円明寺地区で実施した。

樽井地区は長岡京市友岡樽井地内にあり、長岡京跡右京第943次調査として実施したもので、長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)に位置する。小泉川の旧流路内の土砂を確認した。調査は7月22・23日に実施し、調査面積は10㎡である。

調子地区は、長岡京市調子2丁目にあり、長岡京跡右京九条三坊一町(九条三坊三町)に位置し

付表1 調査一覧

地区名	調査回数	所在地	長岡京推定地、遺跡名	調査面積	現地調査期間	担当
円明寺	右京第940次	長岡京市調子3丁目	長岡京跡右京九条三坊二町(新条坊呼称：右京九条三坊四町)、裕遺跡	430㎡	5月14日～6月27日	森島
	右京第939次	大山崎町円明寺小字松田	長岡京跡右京九条三坊二町(新条坊呼称：右京九条三坊四町)、松田遺跡	150㎡		
調子	右京第938次	長岡京市調子2丁目	長岡京跡右京九条三坊一町(九条三坊三町)	175㎡	5月7日～5月27日	中川
樽井	右京第943次	長岡京市友岡樽井	長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)、友岡遺跡	10㎡	7月22日～7月23日	岩松
伊賀寺	右京第943次	長岡京市下海印寺下内田	長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)、伊賀寺遺跡	1,045㎡	5月7日～7月30日	岩松・石尾



第2図 伊賀寺・樽井地区調査トレンチ配置図

ている。長岡京跡右京第938次調査として実施した。調査地は、現調子集落の所在する高台から、JR西日本鉄道がある南に向けて地形が下り、約4mの高低差を有している。周辺の調査では、低地では右京第851次調査(調子地区)で弥生時代中期・庄内期、中世に至るまでの多くの流路跡が検出されている^(注2)。また高台では、右京第825次調査の14トレンチで平安時代の溝等を確認して^(注3)、右京第851次調査(調子地区)では弥生時代と奈良～平安時代の柱穴を確認している^(注4)。対象地内に2本のトレンチを設定したが、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。現地調査は5月7日から5月27日まで要し、調査面積は175㎡である。長岡京跡右京第938次調査として実施した。

円明寺地区は、長岡京市調子3丁目・大山崎町字円明寺小字松田にあり、長岡京跡右京九条三坊二町(新条坊呼称：右京九条三坊四町)・松田遺跡・裕遺跡に位置している。対象地が1市1町にまたがっており、長岡京市分を長岡京跡右京第940次、大山崎町分を同939次調査として実施した。過去の周辺での調査では、長岡京関係の遺構は確認されていないが、松田遺跡では弥生時代後期～古墳時代の竪穴式住居跡が、裕遺跡では弥生時代後期と古墳時代の竪穴式住居跡などが検出されている。調査は計5本のトレンチを設定して調査したが、顕著な遺構・遺物は確認されなかった。現地調査は5月14日から6月27日まで要し、調査面積は右京第939次調査・松田遺跡が150㎡、右京第940次調査が430㎡である。

現地調査は調査第2課調査第3係長石井清司、主任調査員岩松保・森島康雄・中川和哉、専門調査員石尾政信が担当した。総調査面積は1,800㎡である。現地調査及び整理作業にあたっては、多くの方々の参加を得た。また、長岡京市教育委員会、大山崎町教育委員会、京都府教育委員会、地元自治会をはじめ、多くの方々に、ご指導・ご協力をいただいた^(注5)。厚くお礼申し上げます。

2. 調査の概要

(1) 伊賀寺地区の調査

1) 検出遺構

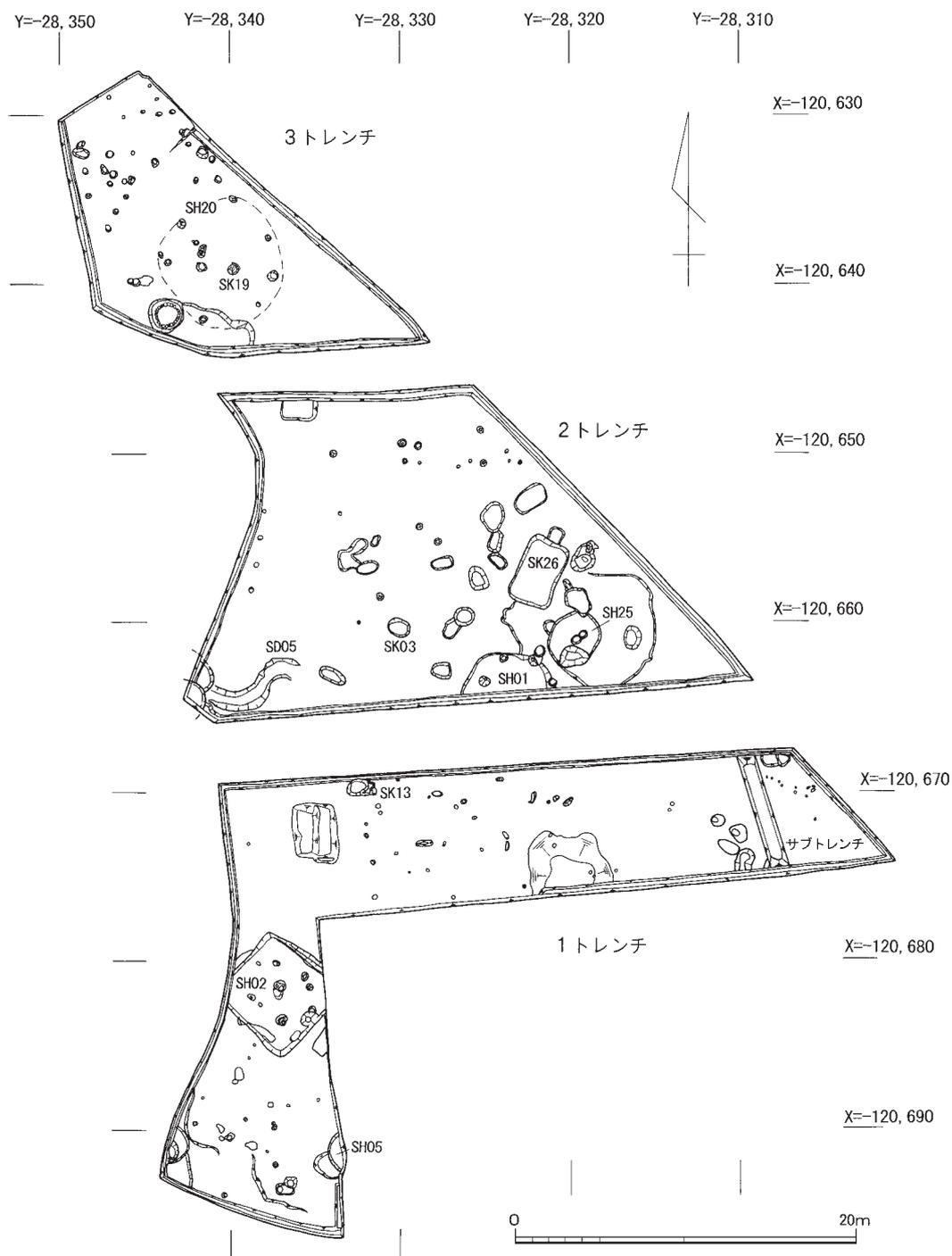
今回の伊賀寺地区の調査対象地は、段丘上に位置しており、西側の小泉川氾濫源とは約1mの高低差がある。平成15年度に実施した右京第799次調査では、小泉川の氾濫源は中世以降に田畑として土地利用されており、段丘上には広範囲に縄文時代の遺構が検出されるものと推定された^(注6)。今回調査した地点の北西側に隣接した位置では、平成19年度に京都第二外環状道路関係遺跡で右京第927次調査が実施されており、縄文時代中期後半の竪穴式住居跡や古墳時代後期の竪穴式住居跡が検出された^(注7)。今回の調査では、その関連遺構が検出されることが期待された。

伊賀寺地区では、農業用水路と農道の確保のためトレンチを3か所に設定して、遺構・遺物の検出に努めた(第3図)。南から北に向けて1～3トレンチとし、調査面積はそれぞれ425.3㎡・430.4㎡・189.3㎡で、計1,045㎡である。

① 1 トレンチ

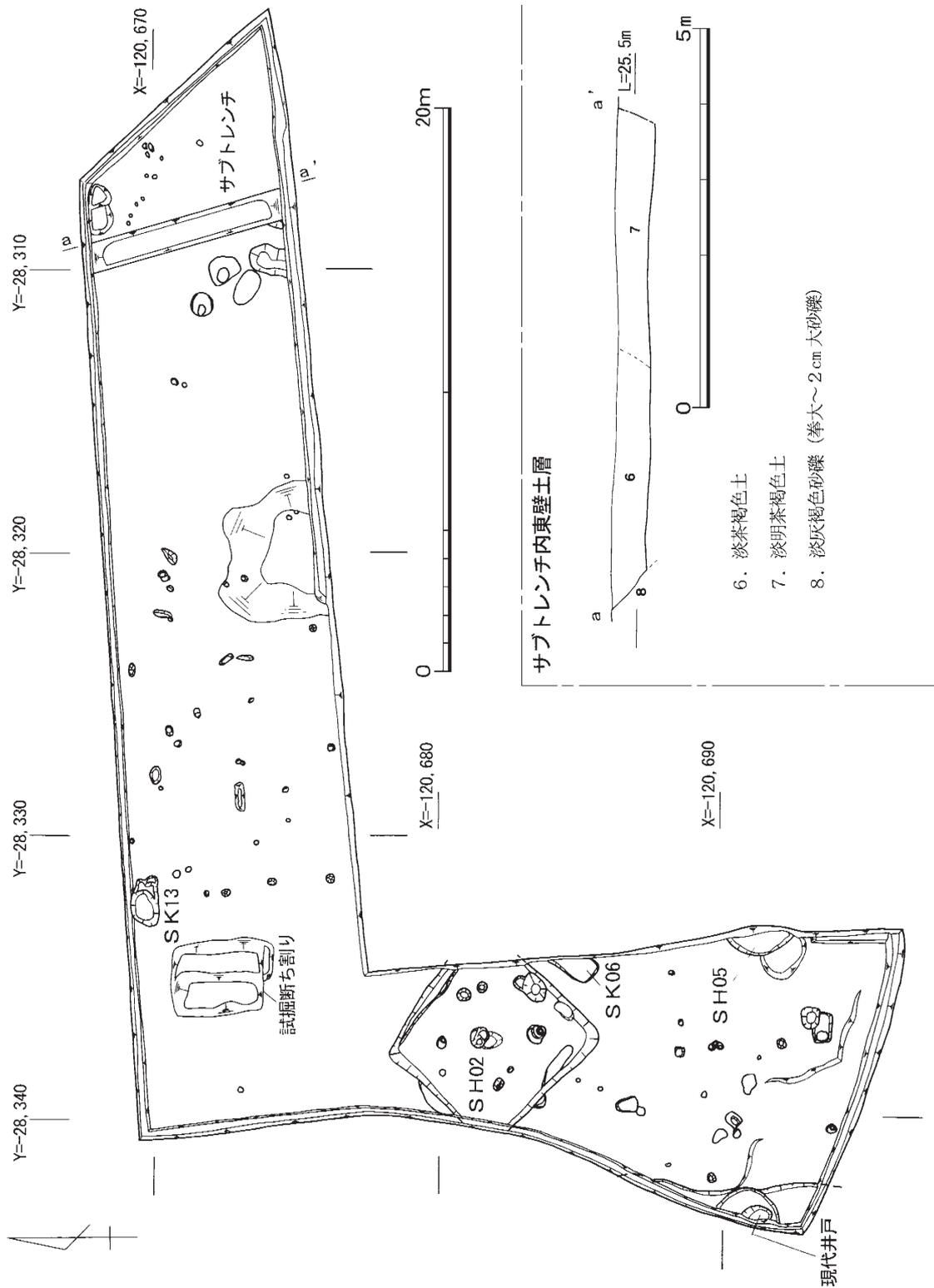
1 トレンチの土層(第5図)は、現耕作土(第1層)下に旧耕作土・床土(第2～4層)が堆積しており、その下位に第5層の暗褐色礫混土がある。この第5層には、若干の須恵器と共に、縄文土

器小片および弥生時代後期～庄内期の土器小片が混じっていた。この下には第6層の淡茶褐色土が堆積していた。第6層上面はトレンチの北西部が高く、ここから東側・南側に向けて緩やかに下る地形をなしている。トレンチ北辺の東西壁で見ると、調査地の西端から約6m東側では、第6層上面は標高26.3m付近にあり、そこから東側に向けて徐々に低くなる。かわりにそれを覆う第5層が徐々に厚くなりつつ堆積している。第6層は調査地東端から6m東側付近では、標高25.85mの高さになっており、そこで第6層の堆積は終わっている。そこから東にかけては、第



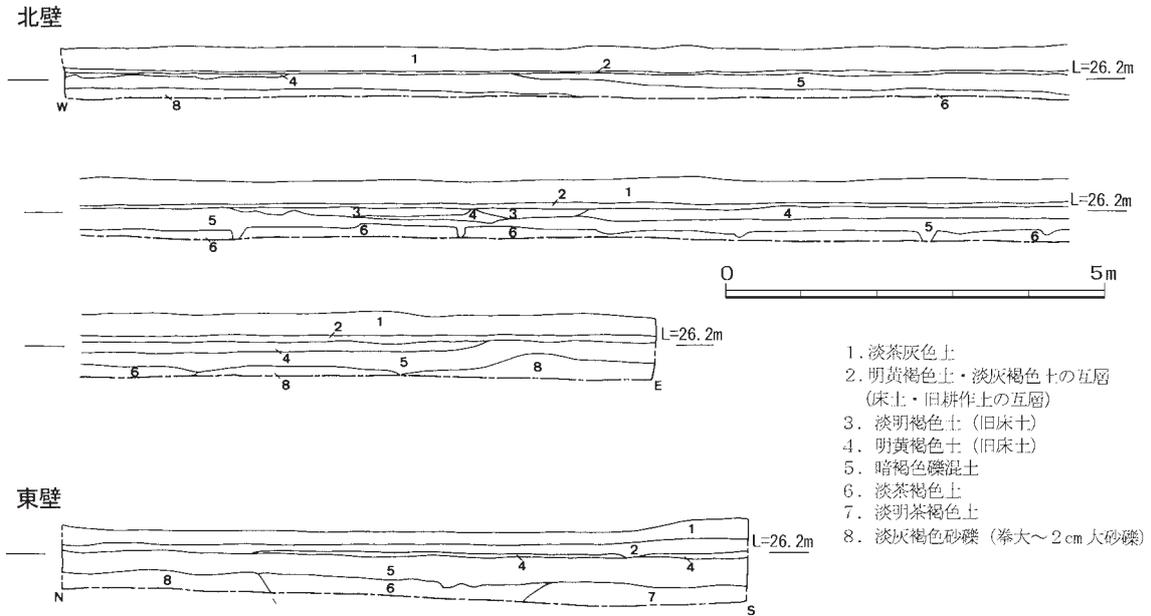
第3図 伊賀寺地区1～3トレンチ主要遺構配置図

6層の下位にある第8層の淡灰褐色砂礫が同レベルに広がっており、トレンチの東端ではやや斜めに上がる堆積となる。このことから、第8層は第6層の下にもぐり込み、第6層の堆積の傾斜とは逆に、西に下る地形を有しているものと判断される。東端付近では、第5層も第8層と同じく、斜めに上がる堆積となっている。最終的にトレンチ東端付近の第6・7層を南北方向に断ち

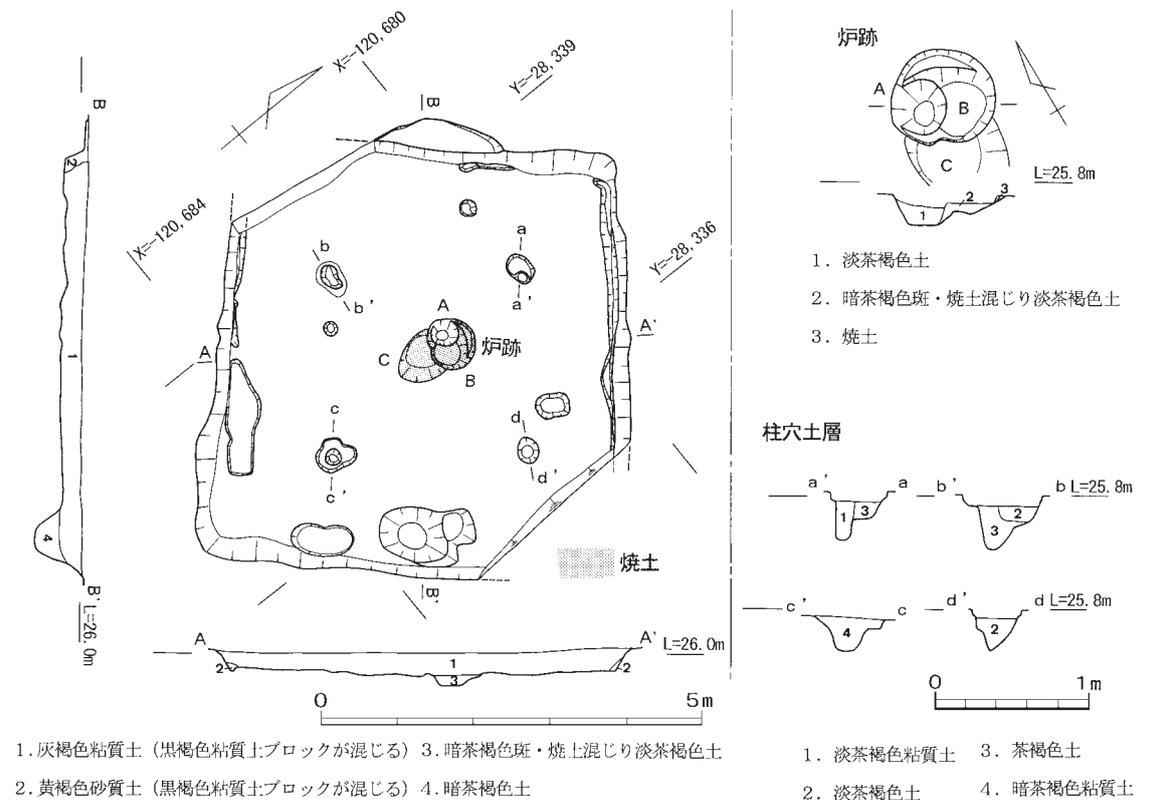


第4図 伊賀寺地区1トレンチ検出遺構配置図

割ったところ、トレンチの北辺付近で第8層が急激に落ち込み、確認しただけでも約50cmの高さの崖面を形成していた(第4図サブトレンチ内東壁土層)。この第8層の崖面は第5図東壁土層でもその一部が認められた。この崖面は、後述のように2トレンチ西南の崖S X 29に向けて東西方向に延びていると推定され、北壁東西土層は、北東から南西に下る傾斜面をほぼ東西方向に観察していることとなる。第6層の東への傾斜と第8層の西への傾斜は、その斜面の落ち込みである



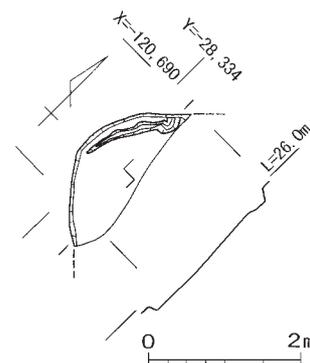
第5図 伊賀寺地区1トレンチ土層図



第6図 伊賀寺地区1トレンチ竪穴式住居跡S H02・炉跡実測図

と理解することができる。そして、先述の第6層と第8層の傾斜の異なりや第5・8層がトレンチの東端部分で東側に上がる傾斜になることも理解できる。

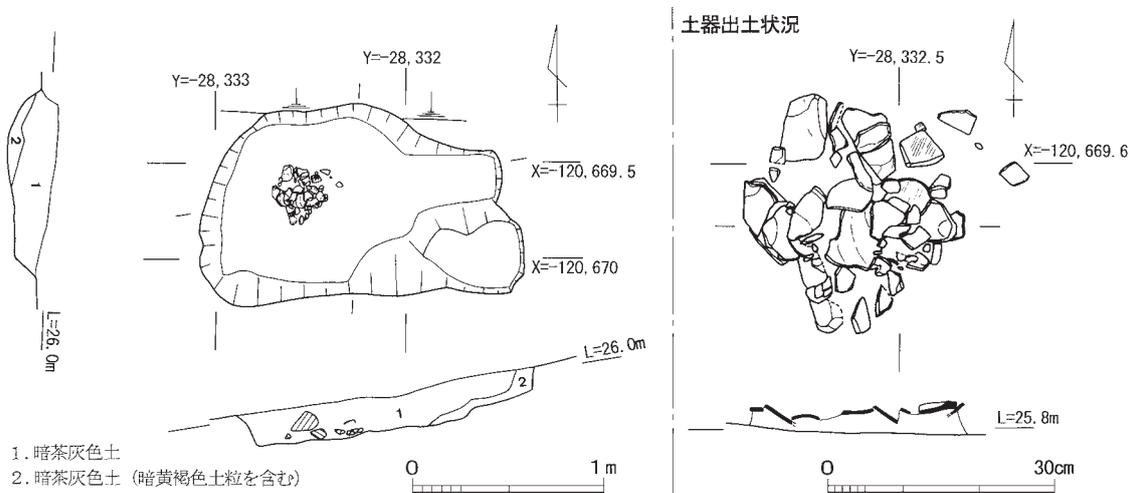
調査は第5層を除去した面、第6～8層の直上で行い、西端では庄内期の竪穴式住居跡・土坑を検出した。トレンチの東半では、小ピットや風倒木痕状の土色・土質の違いを確認したが、確実に遺構と判断できるものはなかった。また、サブトレンチの断ち割りの中からは、第6層を中心にして縄文時代後期の土器片が比較的多く出土したが、この下面では遺構を確認できなかった。



第7図 伊賀寺地区1トレンチ竪穴式住居跡05実測図

1トレンチでは、トレンチの西半部で、竪穴式住居跡2基、土坑2基、ピットを検出した。

竪穴式住居跡 S H02 (第6図) 調査地の南西部で検出した方形の竪穴式住居跡で、5.65×5.8m、検出面からの深さは最大で40cmである。主柱穴は4基を確認し、径20～40cm、深さ20～25cmである。北東壁の全部と西北壁・西南壁の一部に周壁溝が作られていた。床面のほぼ中央では、3基の土坑が重複していた。重複関係から、C→B→Aの順に新しくなる。A・Bの2基は、壁面が赤く焼けていることから、炉を作り替えたものと判断した。最初の炉跡Cは60cm×60cm以上、深さ20cmで、内部は茶褐色土で埋まっており、土坑の壁面は一部が赤く焼けていた。その北側の炉跡Bは、径約60cm、深さ12cmの円形を呈している。壁面が焼けており(第6図右上第3層)、内部には焼土を含む淡茶褐色土(同第2層)で埋まっていた。この炉跡の西側に重なって径40cm、深さ約30cmのピットAが掘り込まれていた。前2者と異なり、壁面は焼けておらず、埋土に焼土も含まれていなかった。南東辺の中央に80×105cm、深さ32cmの貯蔵穴状の土坑が設けられていた。この土坑の北東隅には、幅50cm、長さ30cm、深さ15cmのテラス状の掘り込みが認められた。この土坑内及び上面の床面よりやや上位で壺(第29図107)、高杯(116)が小片となって集中して出土した。また、炉跡の西側では、床面・埋土中で、高杯(117)の土器片が集中して出土した。これらの土器は、住居を廃棄する段階で、貯蔵穴や竪穴を埋め戻した際に破砕した土器を入れ込んだも



1. 暗茶灰色土
2. 暗茶灰色土 (暗黄褐色土粒を含む)

第8図 伊賀寺地区1トレンチ土坑 S K13実測図

のと思われる。住居跡の埋土は灰褐色粘質土で、周壁溝を埋める位置には第2層の黄褐色砂質土が堆積していた。

竪穴式住居跡S H05(第7図) 調査トレンチの南西部で検出した。検出面からの深さは最大で12cm程度で、部分的には2～3cmしかない。底面で、幅10cm程度、深さ2～5cmの溝が壁面に平行して検出されたことから、竪穴式住居跡の竪穴と周壁溝と判断し、竪穴式住居跡の一部と判断した。平面形は弧状または緩やかなL字状を呈しており、竪穴式住居跡S H02と同じく隅丸方形の住居跡とすると、その南東隅部分、1.6m×1.6mの範囲に相当する。その大部分は調査地外である。

土坑S K13(第8図) トレンチの北西部で検出した土坑で、ほぼ東西方向を向く。長辺は最大で1.7m、短辺は1mで、底面は中央部が最も深く、検出面からの深さは最大で25cmを測る。土坑の南東部は、約10cm下がってテラス状を呈しており、その形状が竪穴式住居跡S H02の貯蔵穴と近似している。竪穴式住居が削平を受けた可能性がある。中央部やや西側の底面近くでは、弥生時代後期～庄内期の壺・甕(第29図110～112)が破碎された状態で検出した。

土坑S K06(第4図) 竪穴式住居跡S H02の南東に近接して検出した土坑で、幅1.2m、長さ1.5m以上で、調査地外に伸びる。深さは2～5cm程度で、埋土中より庄内期の土器片が出土している。

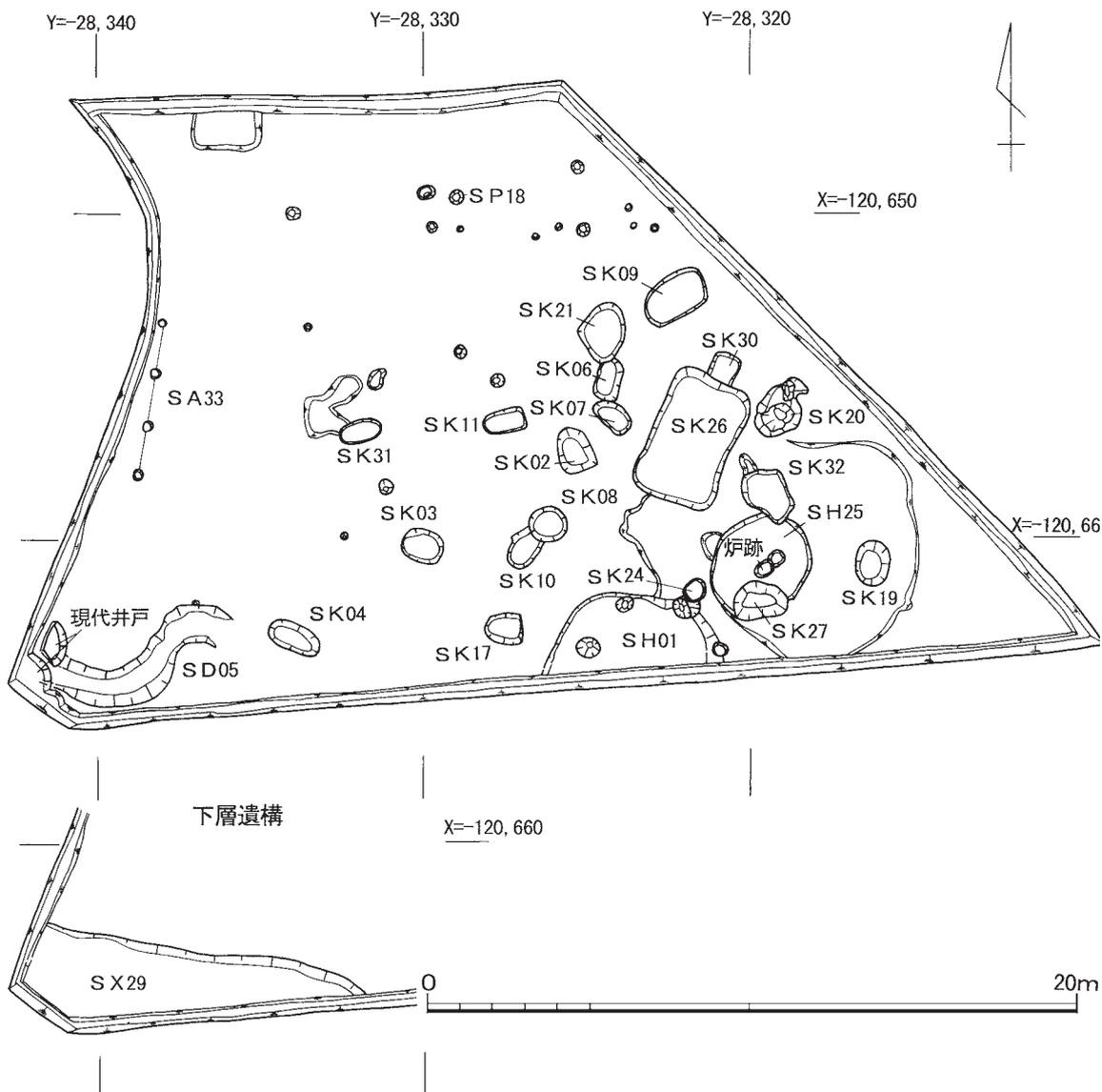
現代井戸(第4図) トレンチの西南隅で検出した井戸で、埋土は黄褐色砂が埋まっていた。掘削を行っていない。

②2 トレンチ

2 トレンチの現地表面は26.9m付近で、層序は、現耕作土(15～20cm)下に床土・旧耕作土・旧床土が15～40cmあり、その下位に第3層の暗褐色砂礫土が、約30cmの厚さで堆積している。この層の下位には、遺構を検出したベース面である淡茶褐色砂質土層、灰白色砂礫層が堆積している。このベース面の高さは、北東部では26.4m近辺にあり、北西部では26.4m付近、南西部では26.4m付近、南東部では26m付近にあり、大きくは北西から南東に向けて下る傾斜をなしている。暗褐色砂礫土を除去した淡茶褐色砂質土層・灰白色砂礫層上面で、縄文時代から古墳時代までの遺構を検出した。暗褐色砂礫土中には縄文土器片が含まれているが、この下面で古墳時代の遺構を検出したことから、暗褐色砂礫土は古墳時代以降の堆積層と判断される。

遺構としては、縄文時代後期後半の竪穴式住居跡2基以上・火葬墓2基・土壙(墓)16基、古墳時代後期の溝・ピット、平安時代のピット、時期不明のピットを検出した。なお、竪穴式住居跡S H01から火葬墓S K26にかけての落ち込み、竪穴式住居跡S H25の東側をめぐる弧状の落ち込みは、遺構を検出するために掘り下げたものであり、遺構ではない。

竪穴式住居跡S H01(第11図) トレンチの中央部やや東側の南辺で検出した半円状の土坑である。竪穴は一辺4.6m程度の隅丸方形もしくは径5～6m程度の円形を呈するものと復元できる。竪穴の埋土は3層に分かれ、第1層の暗茶褐色砂質土内からは多くの土器が出土したが、特に第1層下面に貼り付く状態であった。竪穴の底面は南に向けて約30cm下る傾斜面をなしており、

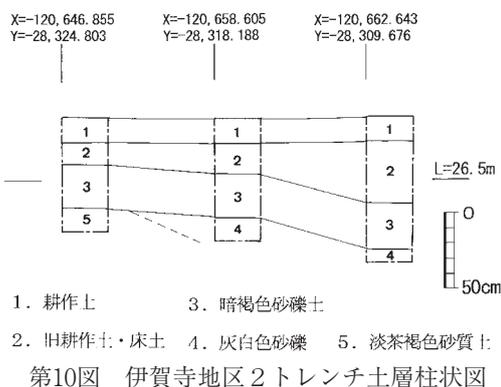


第9図 伊賀寺地区2トレンチ検出遺構

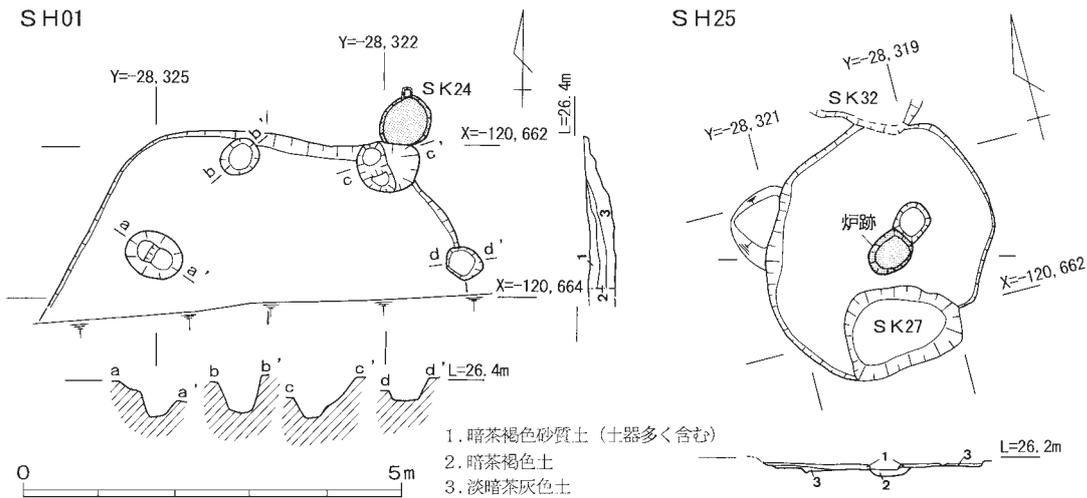
第2・3層中からも土器片が出土したが、それぞれの土層の下面で土器片が集中する状況ではなかった。このような土器の出土状況から、竪穴底面および第1層下面が異なる時期の住居床面であった可能性がある。

この竪穴の第3層下面で半円状に並ぶ柱穴4基を検出した。これらのうち、柱穴cは竪穴上面で検出していたことから、他の柱跡もまた上面から掘り込まれたものと推測される。その配置から、竪穴式住居跡の主柱を構成していたものと推測されるが、遺構の先後関係より、竪穴式住居跡SH01に後出する竪穴式住居があったものと推測される。

竪穴式住居跡SH25(第11図) 調査地南東部で検出した円形の住居跡で、短径2.8m、長径3.5mの楕円形を呈し、検出面からの深さは最大で20cmを測る。主柱穴は検出できなかったが、円形

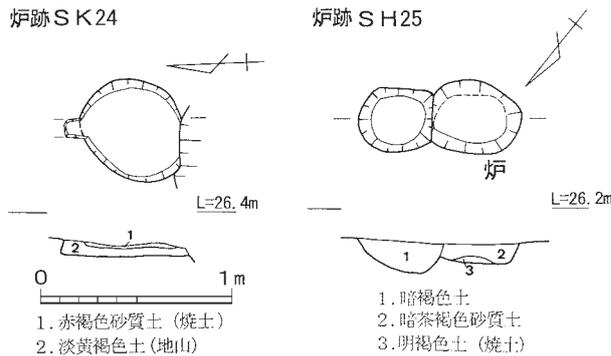


第10図 伊賀寺地区2トレンチ土層柱状図



第11図 伊賀寺地区2トレンチ堅穴式住居跡SH01、堅穴式住居跡SH25実測図

を呈すること、床面中央で炉跡と判断される焼土を検出したことから、堅穴式住居跡と判断した。炉跡は50cm×60cmの楕円形を呈し、堅穴のほぼ中央に位置している。深さは最大で12cmで、底面が赤く焼けていた。炉跡の北東側は、40cm×50cmの円形を呈した深さ約20cmのピットにより破壊されている。堅穴の南辺位置には、土壌墓SK27が上位から掘り込まれている。堅穴式住居跡の炉跡SK24



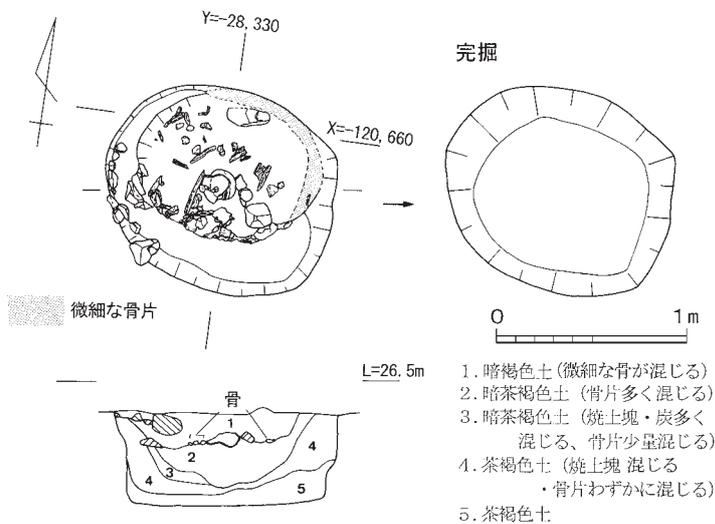
第12図 伊賀寺地区2トレンチ炉跡SK24、SH25炉跡実測図

床面直上の土砂を洗浄したが、顕著な遺物を回収することはできなかった。

炉跡SK24(第13図) 堅穴式住居跡SH01の北側で検出した焼土で、65cm×75cmの円形を呈する。厚さ5cm弱の焼土が分布しており、炉跡と判断した。南側は、柱穴cにより一部削られている。堅穴が削平された住居の炉と推測される。

火葬墓SK03(第12図) トレンチの中央

やや南寄りで検出した。平面形は卵形を呈しており、124×105cm、深さ50cmの坑に多数の人骨片が納められていた。埋土を回収し洗浄したところ約10kgの骨を回収した。骨は細片となっており、一部に大きな骨が並べたようになっていた。骨は一見してバラバラな状態であり、他処で火葬した後に埋め置かれたものである。



第13図 伊賀寺地区2トレンチ火葬墓SK03実測図

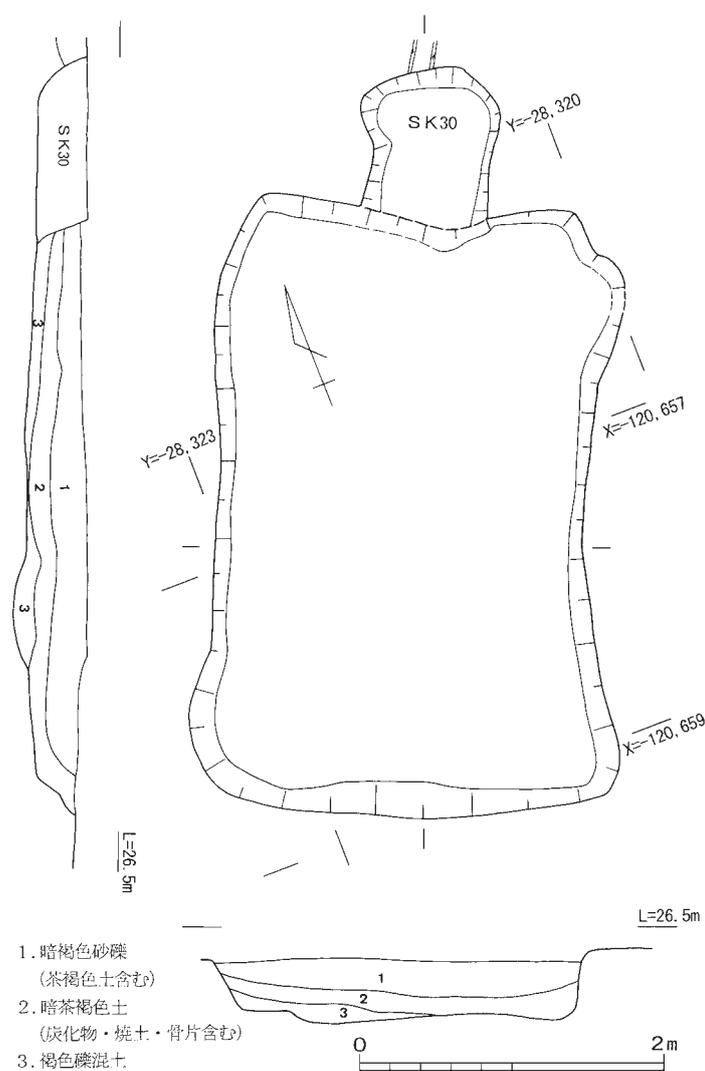
土坑の内部には、最下位に5層

の茶褐色土を10~20cm、その上に焼土・炭が多く混じる3・4層が10cm程度あり、その上位に骨片を多く含む2層の暗茶褐色土が25cm程度堆積していた。比較的大きめの人骨が並べられていたのは2層上面である。この上面に注口土器1点を納めており、これを埋める1層の暗褐色土にもわずかながら骨片が含まれていた。注口土器は注口部が折られて、背後を割られていた。人骨の鑑定によれば、遺骸はすべて骨が新鮮な状態の時に火葬されており、少なくとも10体の人骨が認められ、成人が8体、10代後半と5歳以下の子供各1体を確認できるが、その男女比は不明である。

3・4層の焼土にわずかに骨片が混じることから、遺骸を焼いた場所の焼土を削り取って埋めたと判断される。2層は微細な骨片・骨、炭化物が多く混じり、焼土がほとんど混じらないことから、火葬終了後に、地表上に堆積した炭化物・骨と判断される。2層上面には比較的大きめの人骨が並べられていたので、最初に大きな骨だけを取り置いたのであろう。1層にも微細な骨片が含まれていたが、その量もわずかであることから、意図的に骨を混入したものではなさそうである。

注口土器内から出土した炭化物の放射性炭素年代は、暦年較正年代(1 σ)が1608~1570B.C.(23.8%)、1561~1497B.C.(44.4%)である。

火葬墓 S K 26 (第14図) 火葬墓 S K 03の東側約8mのところの位置している。土壌の規模は、405×285cm(最大)、400×240cm(中央)、深さ40cm(最大50cm)である。焼土・微細な骨・炭が厚さ10~15cmの帯状にはいつていた。ほぼ全面に焼土・微細な骨・炭化物が分布するが、平面的には4ないし5群に集中するように見える。火葬墓 S K 26では、骨・焼土・炭化物が1セットとなり4~5群をなしていた。これらは微細な骨が散らばった状態であったが、西南部では頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・肩甲骨・四肢長管骨・手骨・足骨といった全身の骨が30×12×12cmの中に、四肢長管骨を中心として束ねられた状態であった。1体分の骨を1



第14図 伊賀寺地区2トレンチ火葬墓 S K 26実測図

か所に集めて埋納し、その周囲に焼土・炭化物を置くというのが火葬墓S K26での埋納の仕方であったと想定される。火葬墓S K03と較べて骨片は微細であり、当初人骨とは鑑定できなかったが、残りの良い一群を見つけるに至って、人骨と同定できた。火葬墓S K03と同様、高温で焼かれている。

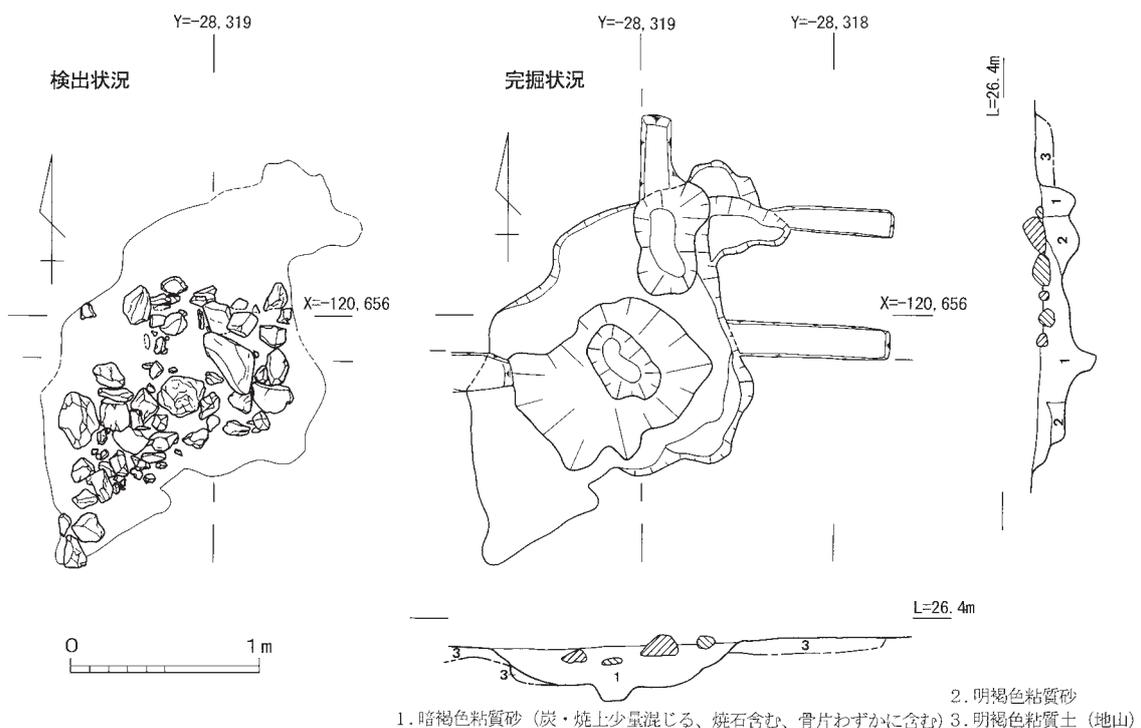
内部の石や土壌の壁面が焼けていないこと、炭・人骨・焼土のセットが層序をなして堆積していないこと、焼土は小さな塊となって砕かれた状態であること、南東部分で検出した人骨は比較的大きく、頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・肩甲骨・四肢長管骨・手骨・足骨が束ねられた状態であることから、他処で火葬された骨・炭化物・焼土が土壌内に納められたと判断した。

土壌内の約1/2の土砂を洗浄して回収した人骨の総量は約1kgである。人骨の鑑定の報告にあるように、細片が多く、特定できたのは南東部の集骨だけで、確実なのは1体だけであるが、焼土・炭・骨の分布からおそらく4～5体以上の骨が納められている。

埋土中には縄文土器片が比較的多く混じるが、意図的に埋納されたようなものは確認できなかった。洗浄土中より、玉(穿孔のあるもの)4点(半裁品)、同石質の小破片約15点を回収し、分析の結果、碧玉であることが明らかとなった。火葬時に着装されていたものかどうか、副葬品であるのか、不明である。また、石鏃4点が出土したが、破損したものである。このほかに、サヌカイトの剥片が多く回収できた。

土壌内から出土した炭化物の放射性炭素年代は、暦年較正年代(1 σ)が1609～1514B.C.(68.2%)である。

土坑S K20(第15図) 火葬墓S K26の北東部で検出した土坑で、火葬墓S K26と重複関係を有し、火葬墓S K26に先行するものである。検出時には、拳大から人頭大の石が集中し、火を受



第15図 伊賀寺地区2トレンチ土坑S K20実測図

けて赤化した石も混じっていた。また、検出面では、わずかながら、炭・焼土が含まれているのが認められた。検出した石礫は、北辺・東辺が直線的に揃っているようにも見えただため、当初、石組み遺構と想定したが、最終的には不定形の土坑の内部に石を入れたものと判断した。南北1.55m、東西1.4mの不整形な方形を呈し、断面を見ると2段の掘形となる。1段目は10～15cm掘られて、ほぼ平らとなり、2段目は、中央に70×90cm、深さ25cmの楕円形のスリバチ状の土坑、北端に30×60cm、深さ10cmの長方形の土坑が穿たれている。検出面からの深さは最大で33cmである。基本的には、第1層の暗褐色粘質砂が埋土としてあり、この土砂中に炭化物・焼土がわずかに認められ、しかも数ミリ程度の骨片も数点出土した。この第1層の上部に石礫が入っていた。第1層の下位には第2層の明褐色粘質砂が部分的に堆積していた。骨片がわずかに出土したが、土坑の形状が不定形であることから、土壙墓とは判断できない。火葬墓S K03・26はともに火葬した場所の焼土を掻き取っているものと推測されることは先述したところであるが、土坑S K20からは焼土・炭化物と共に骨片がわずかに出土したこと、埋土が2層あり、掘り返されたとも判断できるため、遺骸を火葬した場所そのものである可能性が指摘できる。

土壙(墓)は16基検出した。人骨の出土は見なかったが、調査地の南東部に集中していること、近接して火葬墓S K03・26を検出したことから、土壙墓と理解して報告する。

土壙墓S K02(第17図) 長辺1.3m、短辺0.85～1.1m、深さは0.15mである。

土壙墓S K04(第17図) トレンチの西南部で検出した土坑で、壁面の立ち上がりは緩やかで、南辺に沿って2段墓壙状を呈している。長辺1.8m、短辺0.82m、深さ最大で0.2mである。

土壙墓S K06(第16図) 土壙墓S K07に切り勝ち、土壙墓S K21に切り負けている。長辺が1.25m、短辺が0.7m、検出面からの深さは25cmである。東辺は緩やかに立ち上がるのに対して、西辺はややオーバーハング気味に立ち上がる。

土壙墓S K07(第16図) 土壙墓S K06に切り負けており、長辺1.2m、短辺0.7m、検出面からの深さ約10cmである。

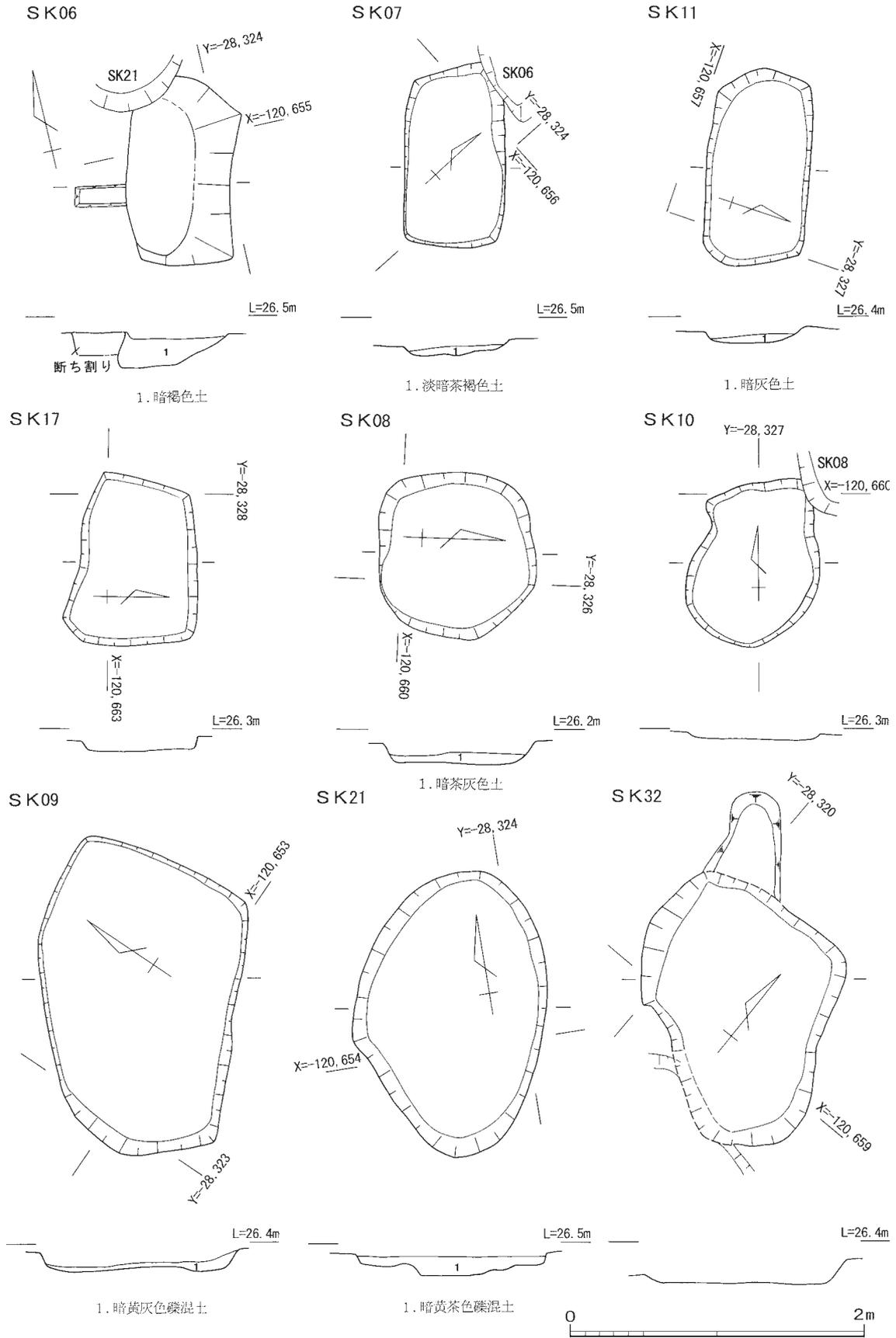
土壙墓S K08(第16図) 土壙墓S K10の北東側に重複しており、切り合い関係より土壙墓S K10に後出するものである。隅丸方形を呈しており、長辺1.15m、短辺1.05m、検出面からの深さは最大で15cmである。

土壙墓S K09(第16図) 火葬墓S K26の北部で検出した土坑で、ややいびつな長方形を呈する。長辺2.2m、短辺は1.1～1.4m、検出面からの深さは最大で15cmである。埋土は暗黄灰色礫混土である。

土壙墓S K10(第16図) 土壙墓S K08の南西側にあり、切り合い関係より土壙墓S K08に先行するものである。不定形な方形を呈しており、長辺1.1m、短辺0.8m、検出面からの深さは最大で6cmである。

土壙墓S K11(第16図) 平面形は長方形を呈しており、長辺1.3m、短辺0.7m、検出面からの深さは最大で10cmである。

土壙墓S K17(第16図) トレンチの南部で検出した土坑で、長辺1.2m、短辺0.7～0.9m、深さ



第16図 伊賀寺地区2トレンチ土壙墓実測図(1)

10cmを測る。

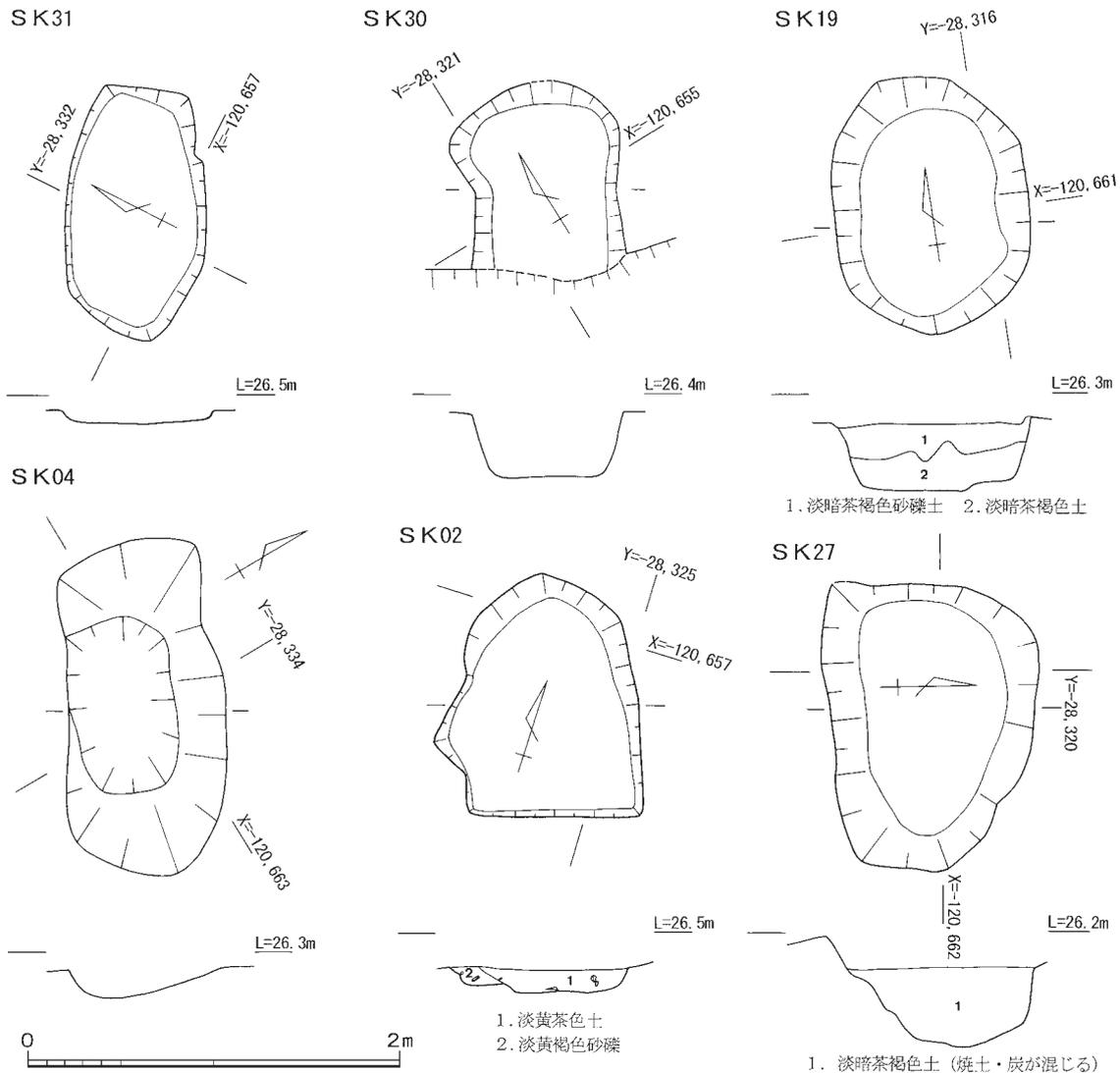
土壙墓 S K 19 (第17図) トレンチの南東部で検出した土坑で、長辺1.4m、短辺1.05m、深さ40cmを測る。

土壙墓 S K 21 (第16図) 土壙墓 S K 06に切り勝つ土坑で、平面は長楕円形を呈する。長辺1.95m、短辺1.3m、検出面からの深さ15cmである。底面は凸凹を呈している。

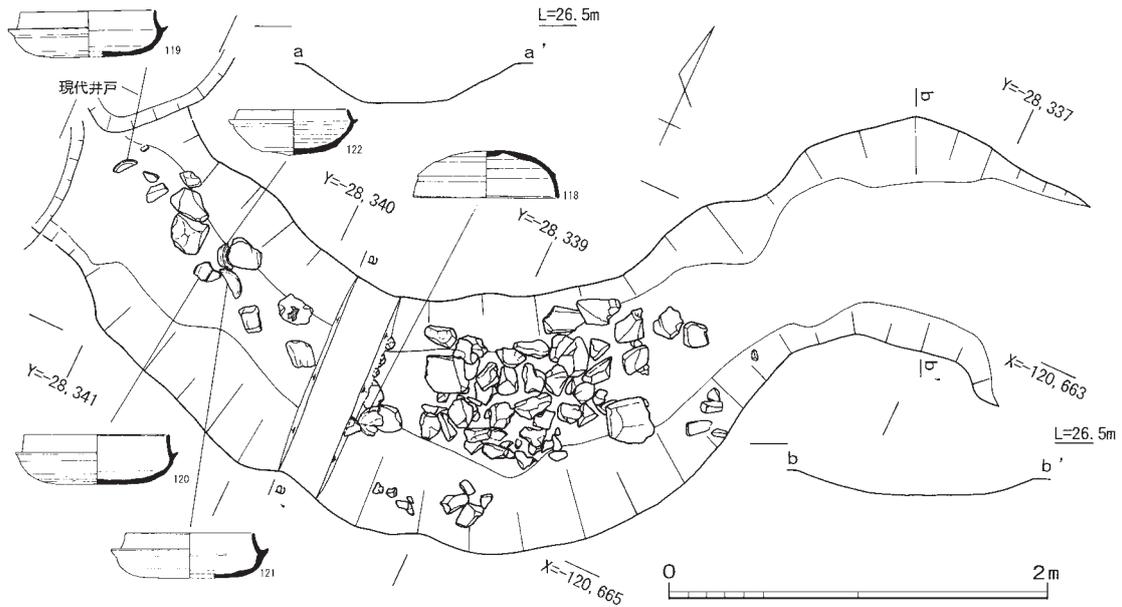
土壙墓 S K 27 (第17図) トレンチの南東部で検出したもので、竪穴式住居跡 S H 25に切り勝つ土壙である。平面は長楕円形を呈する。長辺1.45m、短辺0.65~1.15m、検出面からの深さは最大60cmである。埋土中にわずかではあるが、焼土・炭化物が混じっており、火葬骨を納めた可能性がある。埋土を洗浄したが顕著な遺物は回収できなかった。

土壙墓 S K 28 平面形は東辺が鋭角となる台形を呈しており、長辺0.8m、短辺0.45m、検出面からの深さは最大で15cmである。

土壙墓 S K 30 (第17図) 火葬墓 S K 26に南半が壊されており、現存の長さ1.0m、短辺は0.7~0.9m、検出面からの深さは最大で35cmである。



第17図 伊賀寺地区2トレンチ土壙墓実測図(2)



第18図 伊賀寺地区2トレンチ溝S D05実測図

土壇墓S K 31 (第17図) 平面形は隅丸長方形で、長辺1.25m、短辺0.75m、検出面からの深さは最大で7cmである。

土壇墓S K 32 (第16図) 南側の竪穴式住居跡S H25に切り勝つ土坑で、平面形は南側にややすぼむ隅丸長方形で、長辺1.6m、短辺1.35m(最大)、検出面からの深さは最大で30cmである。

崖面S X29 調査地の西南部、溝S D05の下位で検出した土坑状の落ち込みで、西北西-東南東方向にほぼ直線的に検出した。検出した深さは約50cmあり、南に向かってさらに深くなる。壁面はほぼ直に立ち上がる。埋土は淡茶黄色土~茶褐色土で、1トレンチ東端のサブトレンチ内の堆積土に近似し、その崖面に連なるものと推定される。内部から同じく、縄文土器片が出土している。

溝S D05 トレンチ南西部で検出した溝で、西端は現代のモルタル井戸に切られている。平面形はS字状を呈しているが、屈曲部の曲がりはやや緩やかである。東半部の、石が途切れる辺りから北東部にかけては徐々に浅くなり、最終的には検出面と同じ高さとなって終わる。幅は最大で1.35m、深さは最大で20cm、総長約6.2mにわたって検出した。南辺溝の埋土中に人頭大の石が集中しており、石の間で須恵器杯身・杯蓋がほぼ完形の状態で検出できた(第30図118~122)。その性格は不明である。

ピットS P18 トレンチ北辺の中央付近で検出したピットで、内部にほぼ完形の須恵器高杯(第30図123)が正立して出土した。規模は45×50cm、深さは15cmである。

柵列S A33 トレンチ西辺の中央部で検出した4基のピットで、径30cm、深さ5~10cmのもので、柱間は1.6mを測る。遺物は出土しなかった。

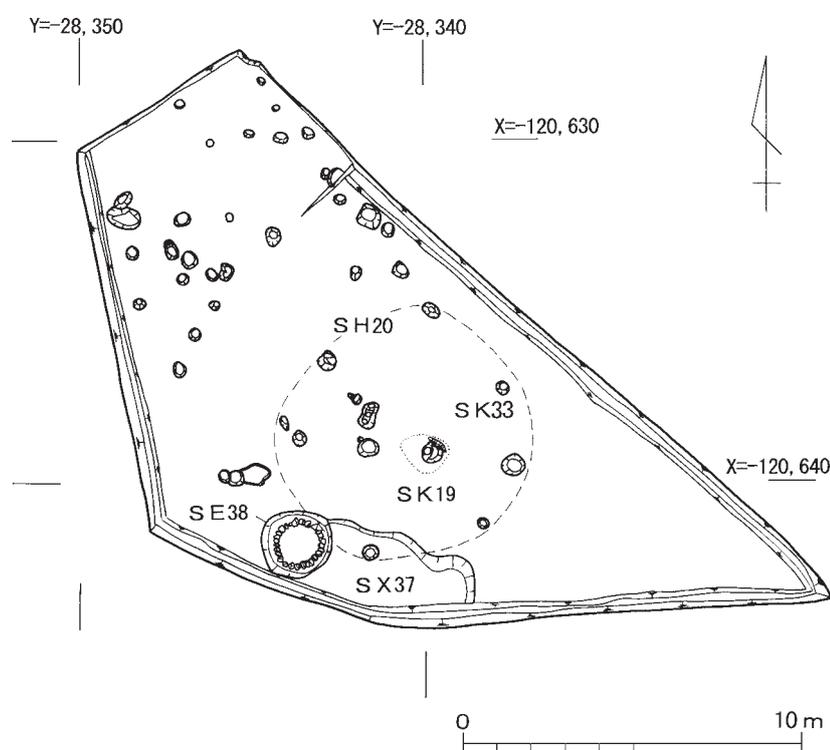
現代井戸 調査地の西南隅で検出した井戸で、溝S D05に切り勝つものである。モルタルの井戸側を確認した。

③3トレンチ(第19図)

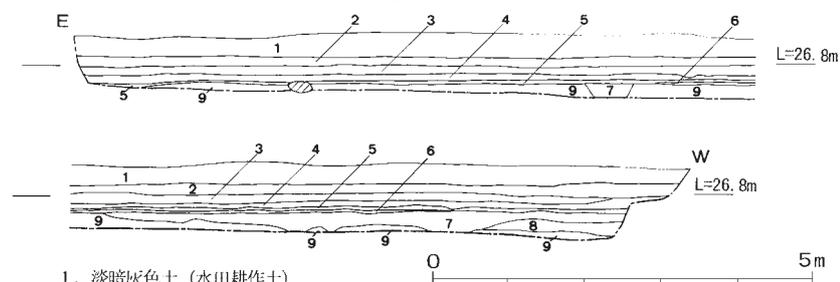
2トレンチより一段高い水田となっており、現地表の高さは27.2m付近である。現地表下約65cmの間は現代耕作土と床土、旧耕作土・旧床土が堆積している。この下には淡黄褐色砂質土・淡茶褐色砂質土が堆積しており、この上面が遺構検出面である。いわば、耕作土関係の層序の下が、すぐに遺構面となる。トレンチの南辺部には淡灰色砂礫(S X37)が堆積しており、縄文土器片が含まれていた。遺構と言うよりも、地形の窪地に遺物が入り込んだ状況であった。

検出した遺構には、縄文時代中期末の炉跡及びその周囲の柱列からなる竪穴式住居跡、縄文時代～平安時代のピット等を検出した。

炉跡 S K 19 (第21図) トレンチ中央部分で検出した炉跡である。竪穴式住居跡 S H 20床面の中央やや東側に位置し、竪穴式住居跡 S H 20に伴うものと考えられる。北東辺には長さ65cm、幅50cm、厚さ20cmの大形の石が据えられており、他辺は粘土を貼り付けたものである。まず、60×70cm、深さ約30cmの坑を掘り、坑の底を第5層で埋めて整地し、北東斜面に石を据えて固定する。第5層の上面および坑の3方向には厚さ2～5cmに粘(質)土を貼り付ける。また、炉本体を中心に110×130cm程度の範囲にも粘(質)土を貼り付けており、南側で約10cm、北側で約20cmの範囲は熱により赤化している。火を頻繁に使用したために、石材は焼けて赤化しており、しかも縦方向にひび割れており、石材を取り上げた時点でバラバラになった。炉本体の粘土部分もまた、火のために赤く変色し、固く焼けていた。炉の内部には土器片や焼土、焼けた石が詰まっており、これらを取り除くと、炉本体の底

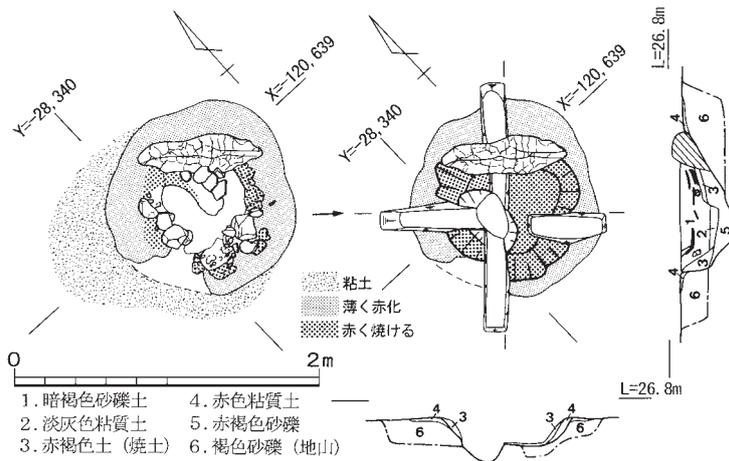


第19図 伊賀寺地区3トレンチ検出遺構



- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1. 淡暗灰色土 (水田耕作土) | 6. 黒褐色斑混明黄褐色土 (旧床土) |
| 2. 黄褐色土・淡灰白色土 (床土・旧耕作土) | 7. 淡灰色砂礫 (φ 2cm 程度が多い) |
| 3. 淡黄褐色土・淡黄灰色土 (旧床上・旧耕作土) | 8. 淡茶褐色砂質土 |
| 4. 淡黄褐色土・淡黄灰色土 (旧床上・旧耕作土) | 9. 淡黄褐色砂質土 |
| 5. 明黄褐色土 (旧床土) | |

第20図 伊賀寺地区3トレンチ土層図



第21図 伊賀寺地区3トレンチ炉跡SK19実測図

SK19は柱跡から復元できる住居跡中央部よりやや東に位置している。炉跡SK19の北東部分から東側にかけては、縄文土器片が広範囲に散らばっており、ほぼ同一平面で検出したことから、竪穴式住居の床面に貼り付いていたものと理解できる。主として、北白川C式期の土器片が出土したが、元住吉山～宮滝式の土器片も数点出土した。

井戸SE38 トレンチの西南部で検出した石組みの井戸である。現代農業用の溜井戸で、約50cm掘り下げたところで、石組みが数段分確認できたが、これらの石材の安定が悪いため、これ以上の掘削を取りやめた。径2.0～2.2mである。遺物の出土はなかった。

落ち込みSX37 井戸SE38の東側で検出した、長さ4.3m以上、幅2.3m以上、深さ最大で20cmの落ち込みである。第20図の3トレンチ南壁土層の第7層淡灰色砂礫に相当するもので、内部より縄文土器片が出土している。その性格は不明である。

3トレンチの北半では、径30～50cmのピットを多数検出した。須恵器を出土するものもあるが、大半は縄文土器片が出土するものである。柱の並びに規則性は無く、トレンチ南半で竪穴式住居跡SH20を検出したことから、北半の柱跡もまた、縄文時代の竪穴式住居跡の主柱穴と推定されるが、炉跡や貯蔵穴状の土坑の検出もなく、その詳細は不明である。

2) 出土遺物

出土遺物には、1トレンチの竪穴式住居跡・土坑から出土した弥生時代後期～庄内式の土器、2トレンチの包含層・土坑・竪穴式住居跡から出土した元住吉山式～宮滝式の縄文土器、溝SD05から出土した古墳時代後期の須恵器、3トレンチから出土した北白川C式2～3期の縄文土器がある。律令期の須恵器も3トレンチのピットからわずかに出土しているが、細片のみで、詳細は不明である。また、瓦器や磁器もほとんど出土していない。

① 縄文土器

縄文土器は主として2・3トレンチで出土した。大まかには3トレンチで出土したものは、北白川C式2～3期で、2トレンチ出土のものは元住吉山式～宮滝式の年代観が与えられる。

第22～24図は、北白川C式の土器群で、3トレンチSH20床面およびSK19から出土したものがほとんどである。

面の焼土が長径40cm、短径25cmの楕円形に掻き取られていた。

竪穴式住居跡SH20 炉跡SK19の周囲では、主柱穴6基と貯蔵穴と判断される土坑を検出した。竪穴式住居跡の竪穴部分がすべて削平を受けているため、竪穴式住居跡の規模は不明であるが、ほぼ円形に並ぶ柱穴の直径は、6.3～7.4mを測る。炉跡SK

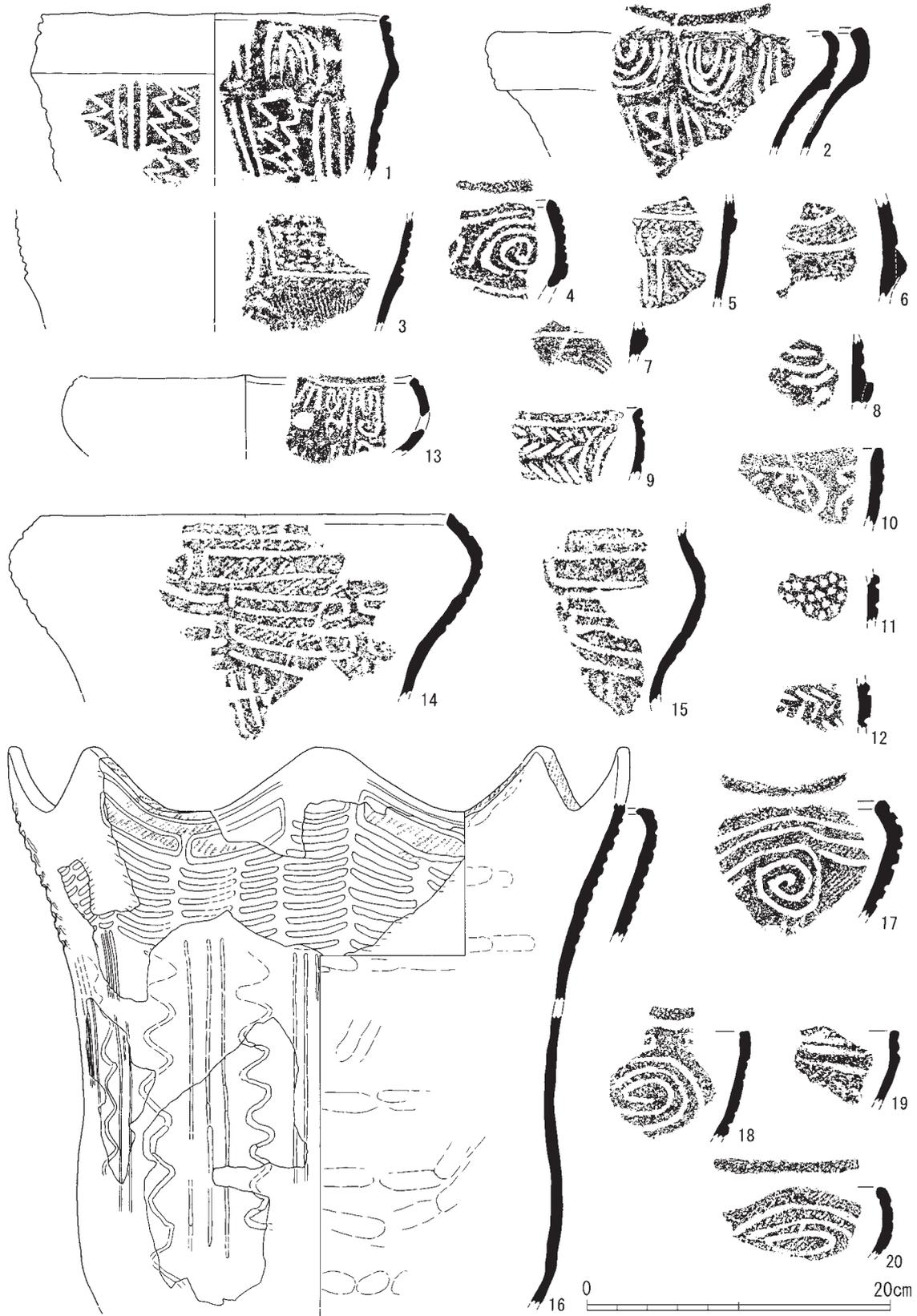
1～8は主文様帯を隆帯で囲むものである。1は平口縁の深鉢で、幅広の口縁がわずかに「く」字状に屈曲して立ち上がる。口縁部文様帯には逆U字形に多重沈線が施されており、その両側が縦方向の隆帯で区分されている。口縁と胴部の間に隆帯があり、主文様を囲む形となる。胴部には、直線と波状の垂下沈線が描かれている。3トレンチS H20から出土した。2は平口縁で、U字状に隆帯で区画し、その内部に弧状に多重沈線を描く。胴部は3本の垂下沈線があり、その間に縦の波状沈線が施されている。口縁端面に縄文が見て取れ、R Lである。3トレンチS K19から出土した。3は口縁端部付近の破片で、口縁が外傾して立ち上がる。刺突文が充填されている方形区画およびその左側は隆帯で区分されており、渦巻文が配されるのであろう。胴部はR Lの縄文地である。3トレンチS H20から出土した。4は波状口縁で、やや内湾して立ち上がる渦巻文が描かれ、その上方と下方に沈線1条が描かれており、楕円形区画をなしている。渦巻文のまわりにはやや盛り上がった隆帯が見て取れる。口縁端部、外面には縄文が見て取れるが、摩滅のため、詳細は不明である。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。5～8は、口縁と胴部の境の隆帯が認められる破片である。5は横方向の隆帯の上辺に沈線が描かれており、胴部には2本の垂下沈線が見て取れる。3トレンチS H20床面から出土した。6は渦巻状の沈線の下に隆帯がある。3トレンチS X37から出土した。7は隆帯の上辺に沈線で区画されており、胴部の縄文地が見て取れる。3トレンチS H20床面から出土した。8は多重沈線が描かれており、その横が隆帯となっている。3トレンチS H20床面から出土した。

9・10は、隆帯による区画は認められず、文様帯の違いで口縁部と胴部の違いを構成すると判断される破片である。9は楕円形区画文で、その内部は「く」字筆順の羽状沈線で充填されている。楕円形区画帯の横には渦巻文もしくは半円形の重弧文が配置されている。ともに、3トレンチS H20から出土した。10は、S字の文様の左側に羽状沈線を充填した楕円形区画文を配している。

11・12は上記深鉢の文様帯と判断されるもので、3トレンチS H20床面から出土した。11は刺突文で、12は羽状沈線が3列描かれており、それぞれの列は、左から右方向に向けて描かれている。

13～20は、口縁から胴部を多重沈線で施文する深鉢である。文様は、区画文(13～15)、連弧文(16～19)、その他(20)がある。

13はキャリパー形の器形をなした深鉢で、口縁端部直下に1条の沈線を引き、その下に縦方向の沈線で波状文・竹管文が施されている。補修孔が穿たれている。3トレンチS H20から出土した。14は、15と同じ模様構成で、里木Ⅱ式のキャリパー形の器形を色濃く残す形状である。口縁部に1条の沈線、その下に幅の狭い方形区画文を3単位と1条の沈線を連ね、胴部下半には縦方向の垂下沈線を配する。右側は同様の模様が施されているが、左側は、弧状の沈線が描かれているようである。14は、縄文はL Rである。15は14と較べて口縁端部がやや上方に立ち上がる形状を有する。縄文はL Rである。ともに、3トレンチS H20から出土した。16は波状口縁を有する深鉢で、8単位に復元できる。口縁下に1条の沈線がめぐり、その下に楕円区画文が施される。



第22図 伊賀寺地区出土遺物実測図(1)

さらにその下には、7条の平行に近い多重弧線文が描かれ、胴部は3本の垂下沈線となっている。口縁部にも縄文が施文されており、縄文地LRを施文後に沈線が施文されている。3トレンチSK19から出土した。

17～20は連弧文で文様を構成するものである。17は、波状口縁の波頂部で、内湾して立ち上がる。口縁に平行な沈線2条があり、その下に渦巻文が描かれる。口縁端部、外面にはLRの縄文が見て取れる。18は平口縁が描かれ、口縁直下に楕円形の区画文、その下に「の」字の沈線をめぐらすものである。縄文はLRである。17・18は、3トレンチSH20から出土した。19は3トレンチSX37から出土した。20は、口縁部に肥厚した粘土が内側に折り曲げられている。縄文はLRである。多重沈線を有するもので、波頂部である可能性がある。3トレンチSH20から出土した。

21は、口縁と胴部が「く」字形に屈曲する深鉢である。「く」字形に内傾する波状口縁を有し、8単位の波頂部を有する。口縁直下には楕円区画があり、波頂部下の上下に2つの指頭状のものによる圧痕が施されている。口縁部・胴部上半には渦巻文や区画文の下に直線に近い多重弧線文を横方向に配し、以下は縦方向の3条の沈線とその間を縦走するLR縄文が展開する。3トレンチSH20から出土した。

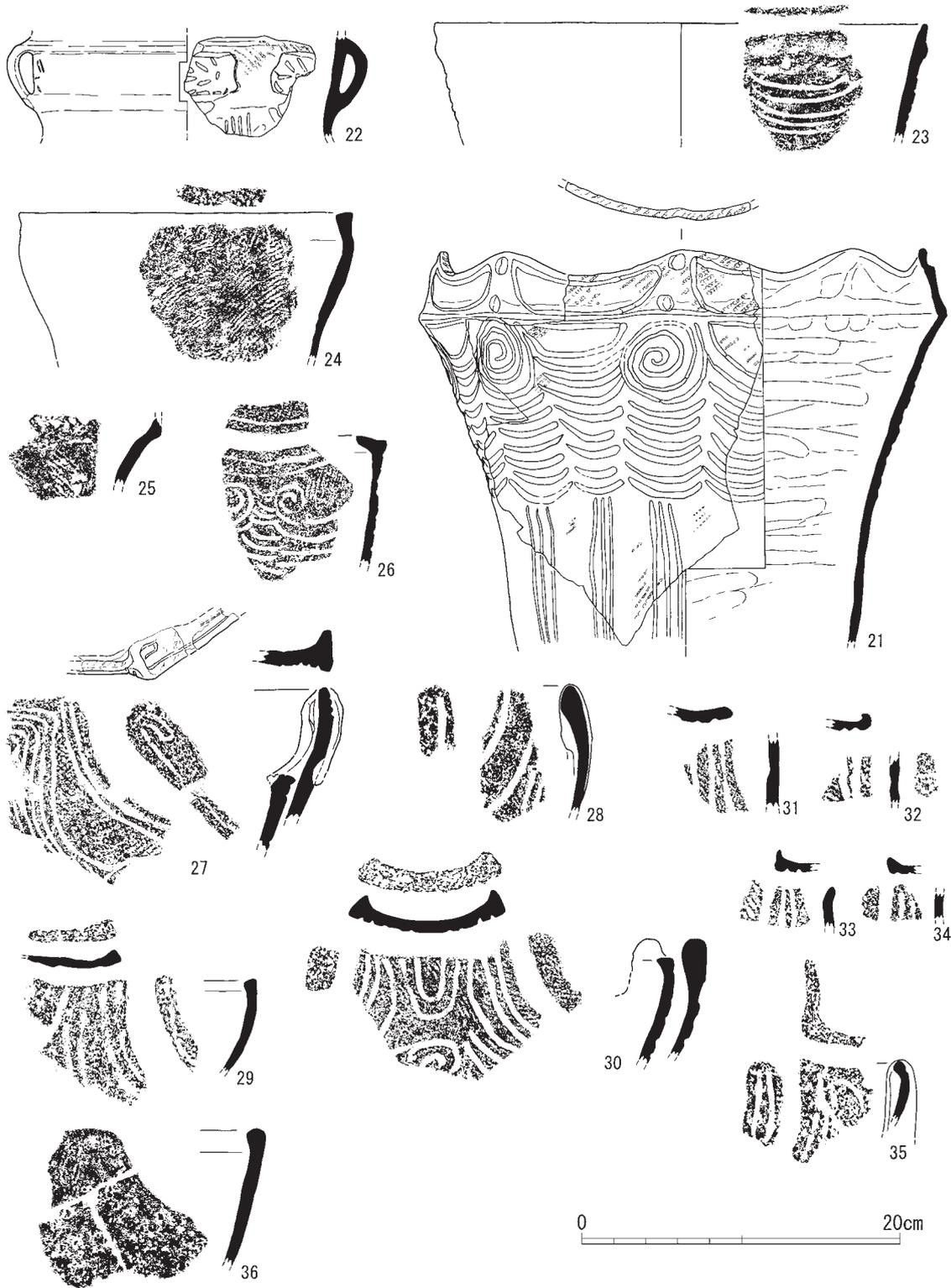
22は、楕円形区画文を有する深鉢で、楕円形区画文のつなぎとして橋状把手がつく。区画文内部は羽状沈線が充填されている。胴部は縦方向の沈線4本が施文されている。縄文はRLである。3トレンチSH20から出土した。

23は、口縁直下が無文の深鉢で、口縁の下に隆帯が1条めぐり、その下部に重弧に沈線が描かれている。3トレンチSX37から出土した。

24・25は、縄文のみで施文する深鉢である。24は、平口縁の深鉢で、口縁部はやや内側に屈曲し、外面および口縁端部に縄文を施文する。口縁部はわずかに内傾して立ち上がる。縄文はRLである。3トレンチSK19から出土した。25は、平口縁深鉢の口縁屈曲部で、横方向に隆帯が貼り付けてある。間隔をあけて縦方向に帯状の施文をしており、縦に施された縄文はLRである。3トレンチSH20の検出時に出土した。

26～33は突起状の山形口縁を有する深鉢C類である。26は、口縁が内側に折れ曲がるよう、粘土が貼り付けられている。縄文はLRである。楕円形区画文に連なるように逆「の」字形の渦巻文が配置され、周囲は平行の多重弧線文が描かれている。27は、山形の口縁部側面に沿って2条の平行沈線があり、波頂部には台形状の山形の多重沈線で描かれている。端面には逆「の」字形の渦巻文が施文されている。縄文はLRである。器壁の胎土・焼成等から、26と同一個体の可能性がある。ともに、3トレンチSH20から出土した。28は、やや間隔を開けて平行する連弧状の2条の沈線と縦方向の2条の沈線が描かれており、側面に1条の沈線が描かれている。縄文はLRである。3トレンチSX37から出土した。29は、連弧状の沈線文が両側から描かれており、端面には1条の沈線が描かれている。縄文はLRである。3トレンチSK19から出土した。30は、波頂部中央が2本の沈線によってU字状に区画され、その下に渦巻文が配置される。両側には連

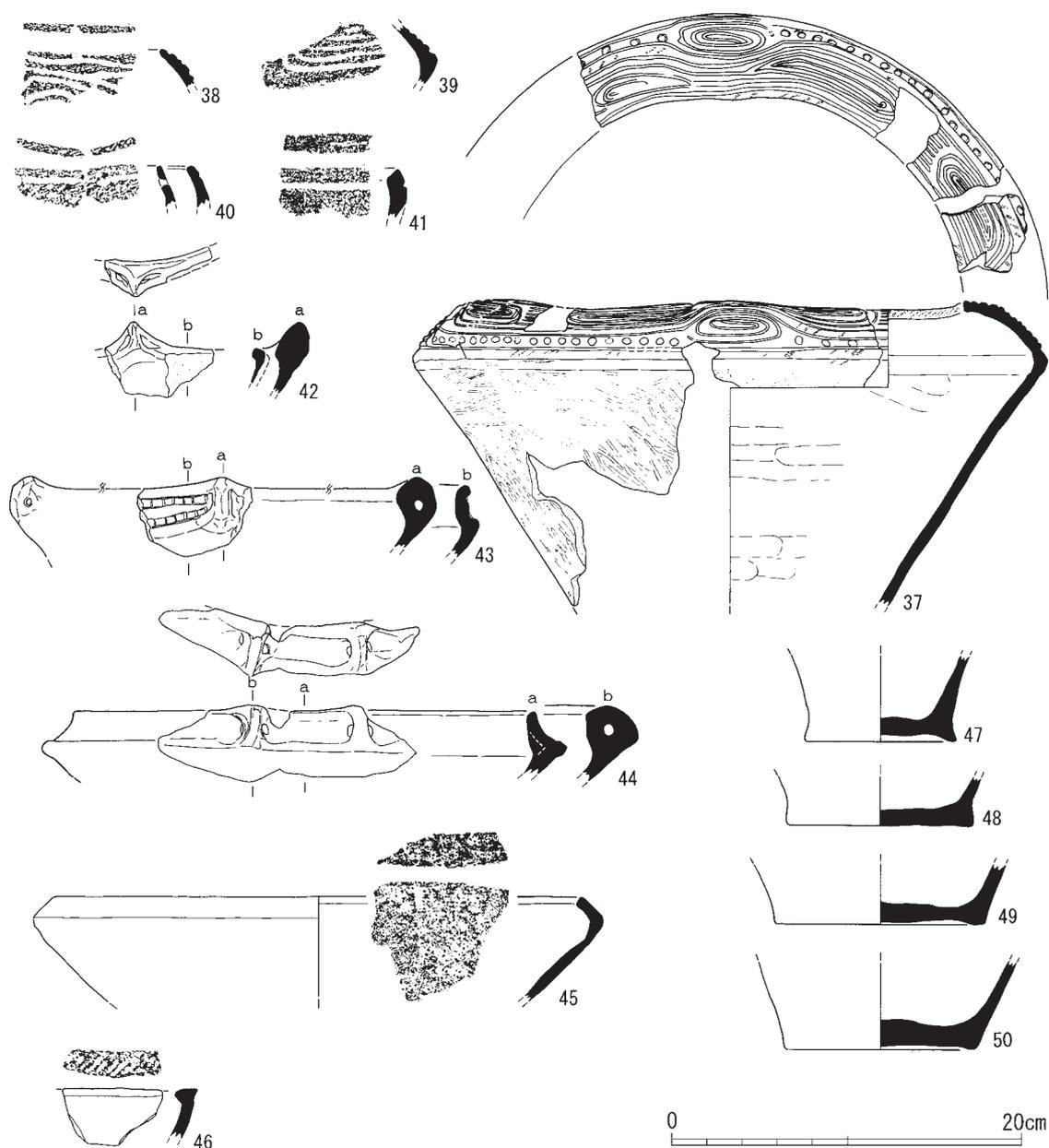
弧状の沈線が描かれている。口縁部には縄文が施文される。縄文はLRである。3トレンチSH 20から出土した。31は、口縁部側面に平行して3条の連弧状の沈線が描かれており、縄文はLRである。3トレンチSK19から出土した。32・34は3トレンチSH20から、33は3トレンチSK 33から出土した。35は、口縁側面に平行した1条沈線の内側に逆U字状の沈線が配置されている。



第23図 伊賀寺地区出土遺物実測図(2)

端面には2条の平行沈線がある。3トレンチSH20から出土した。36は、沈線等の模様は認められないものである。3トレンチSH20から出土した。

第24図37～46は浅鉢である。「く」字形に屈曲した口縁を有し、口縁部に文様を施すもの(37～41)と施さないもの(42～46)がある。37は、胴部からL字形に屈曲した口縁を有する。主模様の渦巻文は低い隆帯で囲まれており、間を多重沈線でつないでいる。文様帯の下辺には竹管文を連ねるものである。器面はよく磨かれている。縄文はLR。3トレンチSH20から出土した。38は、口縁部に2条のゆるやかな波状沈線とその下に連弧文が施され、それぞれの間に縄文が施される。3トレンチの東部掘削時に出土した。39は、多重沈線で加飾されており、図の左下部分には粘土を貼り付けた痕跡が認められ、隆帯がめぐらされていたことがわかる。3トレンチSH20から出土した。40は口縁下に1条の沈線がめぐり、焼成前の穿孔が2孔認められる。縄文はLRである。



第24図 伊賀寺地区出土遺物実測図(3)

41は平口縁で、沈線が1条めぐり。ともに、3トレンチSH20から出土した。

42は、把手のついた浅鉢である。突起状の把手は、両側から竹管状の原体で刺突しているが、貫通はしていない。3トレンチSH20から出土した。43・44は、「く」字に曲がる屈曲部に棒状工具で横位に穿孔した橋状把手が取り付く。43は、口縁部の楕円形区画文を押し引き沈線で描いている。44は、橋状把手が約6cmの間隔を開けて取り付いている。ともに3トレンチSH20から出土した。45は無文の浅鉢で、3トレンチSK19周辺から出土した。46は、口縁側面にLRの縄文が施されている。3トレンチSH20から出土した。

47～50は、3トレンチSH20から出土した底部である。3トレンチSH20出土の土器は、先述のように、北白川C式2・3期が主体であることから、これらの底部もまた、北白川C式2・3期のものと判断される。

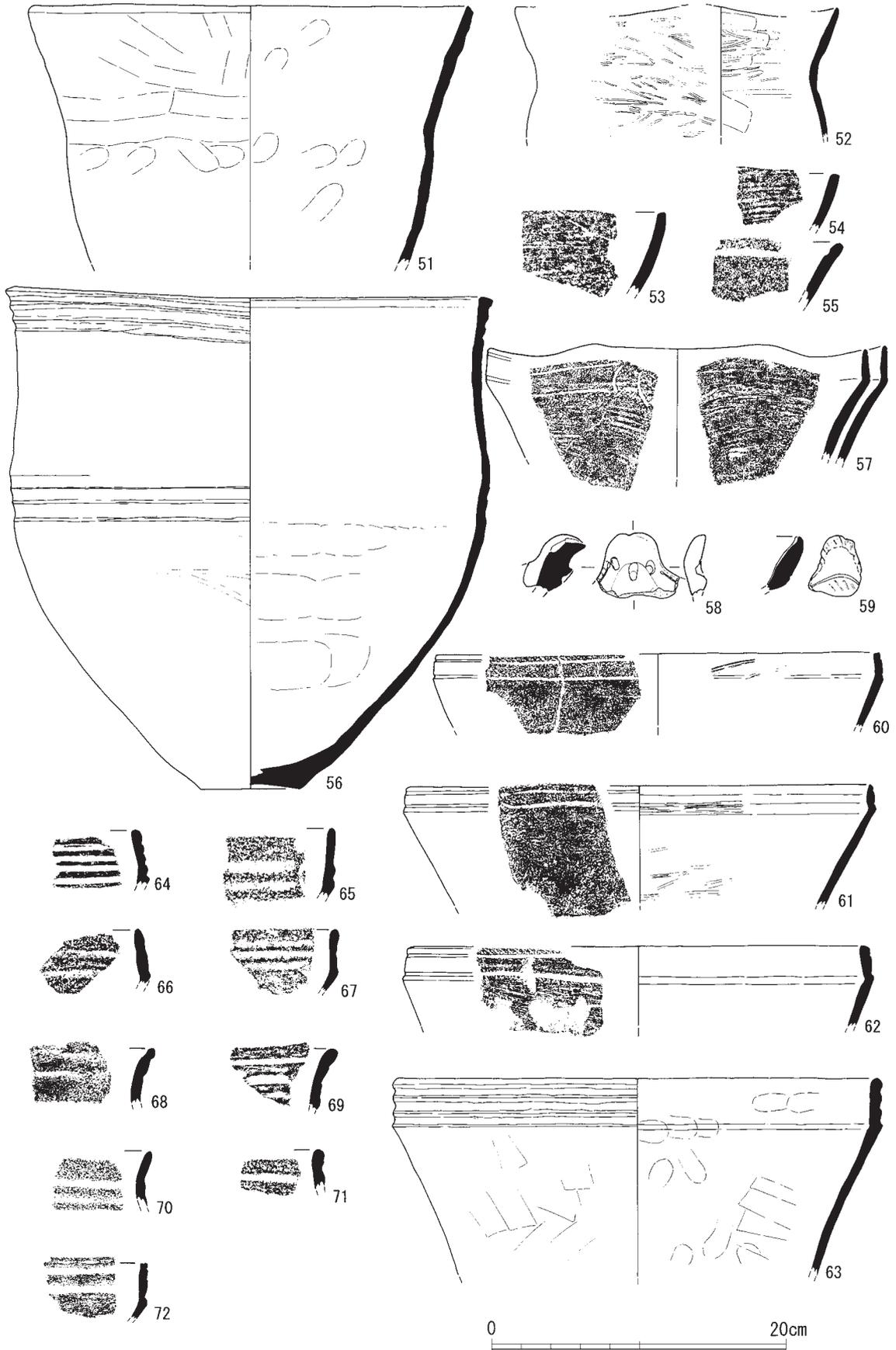
第25・26図は元住吉山～宮滝式の土器で、主として2トレンチから出土したものである。51～71は広口縁深鉢である。51～56は大きく外反しながら口縁部が上方に開くものである。

51は、広口縁深鉢で、口縁端部を面取りしている。頸部と胴部がくびれ、頸部はやや外反する。頸胴部界に不明瞭ながらも1条の凹線をめぐらす。内面には横方向の条痕が明瞭に残るが、外面はナデ調整のため不明瞭である。2トレンチの南壁断ち割り内、崖面SX29を埋める埋土中から出土した。52は内外面共に横方向の条痕が見て取れる。2トレンチSH01から出土した。53・54はともに、内外面共に貝殻条痕が見て取れる。53はSK08から、54はSK02から出土した。55は口縁内側に1条の凹線がめぐりもので、広口縁深鉢であろう。2トレンチSK26北側から出土した。56は口縁部に3条、胴部中央に2条の凹線文を有する。2トレンチSH01から出土した。

57～59は波状口縁深鉢である。57は、口縁部屈曲直上に縄文をLRに施文した後、2条の沈線を平行にめぐらせ、縦方向に逆「ノ」字状に沈線を描いている。2トレンチSH01内埋土から出土した。58は波頂部の突起で、基部が厚く作られている。頂部内面には外面に3孔あけられており、側面には刺突沈線が上下に描かれている。2トレンチ南東部の暗褐色砂礫から出土した。59は波頂部の突起で、基部が厚く作られている。外面には沈線が描かれている。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。

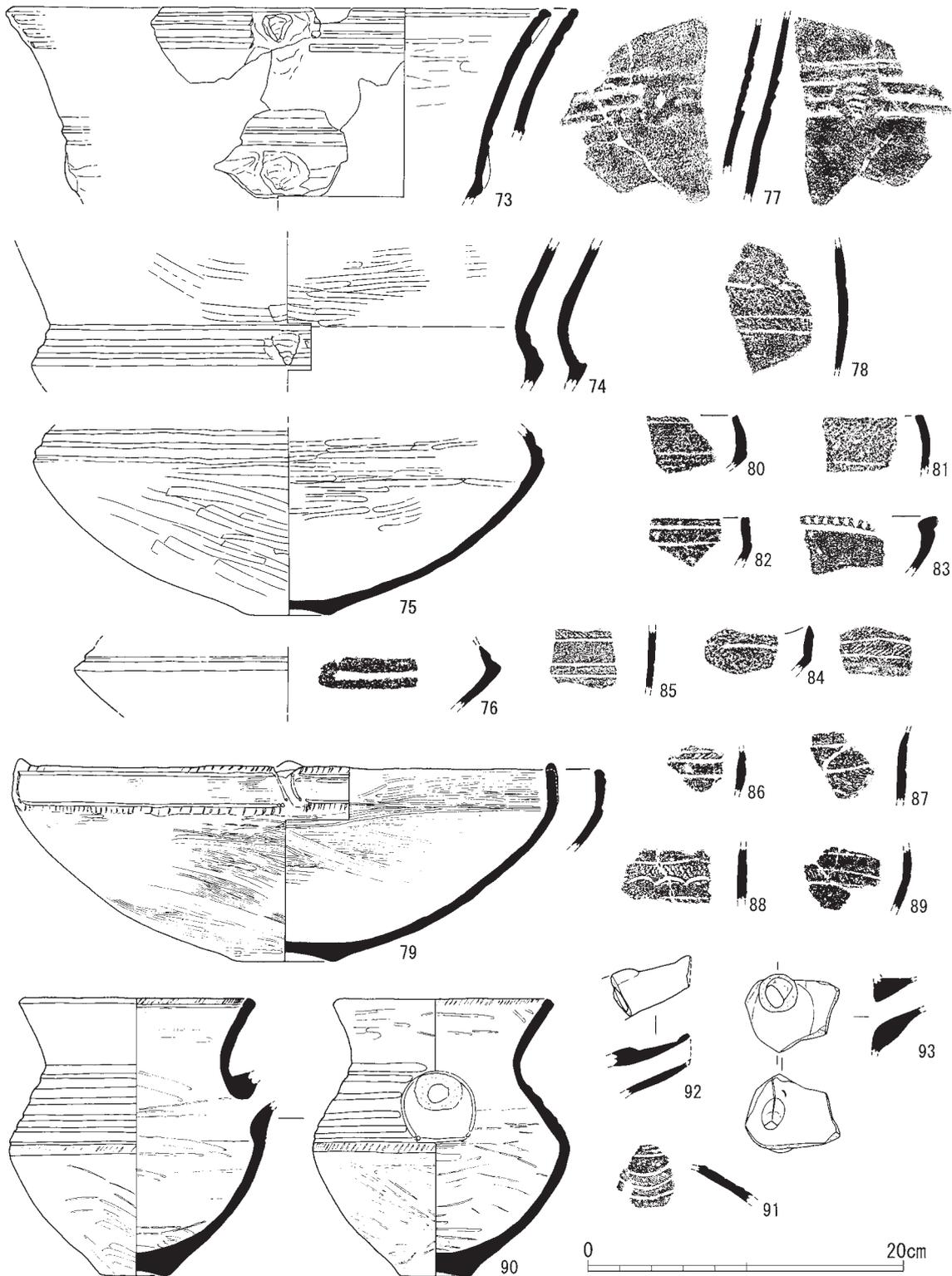
60～63は、口縁が「く」字状に屈曲して立ち上がる平口縁深鉢で、幅の狭い沈線がめぐりもの(60～62)と幅広の凹線がめぐりもの(63)とがある。60～62は、ともに屈曲部内面が強くなでられており、RL縄文地の口縁部に、沈線の間は縄文を磨消している。62は口縁端部に面取りが施されている。これらは2トレンチの南東部暗褐色砂礫から出土した。63は、口縁部が幅広に屈曲し、外面には幅広の3条の凹線がめぐり。2トレンチSK26の南側の暗褐色砂礫から出土した。

64～72は凹線をめぐらせた口縁で、平口縁の深鉢もしくは浅鉢になるものであろう。64は「く」字に立ち上がる幅広の口縁を有し、4条の凹線がめぐり。2トレンチ南東部の暗褐色砂礫から出土した。65は口縁の下部に2条の凹線がめぐり。2トレンチSH01内埋土から出土した。66は平口縁浅鉢で、外面には2条の凹線がめぐり。2トレンチ火葬墓SK26南側の暗褐色砂礫から出土した。67は3条の凹線がめぐり。2トレンチの掘削時に出土した。68はやや外反する口縁を有し、



第25図 伊賀寺地区出土遺物実測図(4)

口縁部に2条の凹線を有する。また、口縁内側にも1条の凹線を有する。2トレンチ中央部の掘削時に出土した。69は幅広口縁部がゆるく外反している。端部は面取りしていない。外面に3条の凹線がめぐる。2トレンチ東南部の暗褐色砂礫から出土した。70は口縁がやや外反するもので、口縁下に2条の凹線がめぐる。2トレンチS H01内埋土から出土した。71は口縁に1条の凹線が



第26図 伊賀寺地区出土遺物実測図(5)

めぐる。2トレンチS H01内埋土から出土した。72は口縁部が幅広に屈曲し、外面に2条の凹線がめぐる。3トレンチS H20から出土した。

第26図73～77は、胴部から頸部に向けていったんすぼみ、上方に口縁が大きく開く形態を持つ広口縁深鉢である。73は口縁部に凹線が3条めぐり、粘土を貼り付けた上から貝殻圧痕が施されている。体部中央にも凹線の上に粘土+貝殻圧痕がなされている。2トレンチS K26および暗褐色砂礫から出土した。74・75は胴部上半に凹線が施され、74には直接貝殻圧痕がなされている。ともに2トレンチS H01から出土しており、同一個体の可能性がある。76～78は深鉢の体部片である。76は、「く」字形に屈曲する胴部に凹線が1条めぐり、凹線は粘土を貼付けた手前で途切れている。上半はない。2トレンチS H01から出土した。77は4条の凹線の上から直接貝殻圧痕がなされている。2トレンチの南壁断ち割り内、S X29を埋める埋土中から出土した。78は3条の沈線があり、上2本の沈線と最下部1本沈線の下には縄文が施されており、RLである。また、最上部の沈線の切れた点から上に向かって半円弧状の沈線が描かれている。沈線両端には刺突が施されている。2トレンチS H01から出土した。

79～89は浅鉢または鉢で、79～83が平口縁、84が波状口縁、85～89が浅鉢もしくは鉢体部片と判断するものである。79は、口縁に平行沈線で画され、上下に斜めの刻み目が施される。2条の沈線の間には、逆「ノ」字状の突起を有し、この左右は上下端に刺突のある沈線で区画される。器面は巻貝条痕によって調整されている。2トレンチS H01から出土した。80は口縁端部に爪状の沈線が施文され、横方向に沈線が3条めぐる。3トレンチS K17から出土した。81は、縄文はLRで、沈線1条が描かれている。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。82は2条の沈線がめぐる。2トレンチS H01内から出土した。83は口縁部下に1条の凹線がめぐり、口縁端面に刻目が施されている。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。84は波状口縁の浅鉢で、2条の狭い沈線の間は縄文地はLRである。2トレンチS H01から出土した。85は、2本の平行な沈線により、磨消縄文帯がめぐる。縄文はRLである。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。86は2条の沈線と斜刻帯で飾り、巻貝回転擬縄文が施される。2トレンチS H01から出土した。87は2条の沈線があり、その下に下弦の連弧文が施される。沈線の間は磨消されており、沈線と連弧文の間は貝殻による擬縄文である。2トレンチ南東部暗褐色砂礫から出土した。88は2条の沈線の下に下弦連弧文があり、縄文地はRLである。下の沈線と連弧文の間は磨消されている。2トレンチS H01から出土した。89は3条の沈線と斜刻帯がある。2トレンチS H01北柱穴(第11図柱穴c)から出土した。

90～93は注口土器およびそれと判断される破片である。90は、注口部は欠損しており、口縁部背後も意図的に割り取られている。頸部がくびれた小型の広口深鉢に注口が付けられた形状をしている。注口部の周囲には刺突沈線が、7時から5時の方向にめぐらされており、胴部上半には凹線が5条めぐらされている。口縁端部内面には沈線が1条めぐり、その端部側に刻み目がめぐり、凹線の下には同方向の刻み目を有する斜刻帯がめぐる。2トレンチS K03から出土した。91は1条の沈線とその下に連弧状に3状の沈線が描かれており、上2本の重弧状沈線の間は刻み目

が施され、下の2本の沈線は途中で途切れ、その端部にそれぞれ刺突が施されている。注口土器の体部片と判断するものである。2トレンチSK23から出土した。92・93は注口土器の注口部で、92は2トレンチSH01内から、93は2トレンチ暗褐色砂礫層から出土した。

(岩松保・木村啓章)

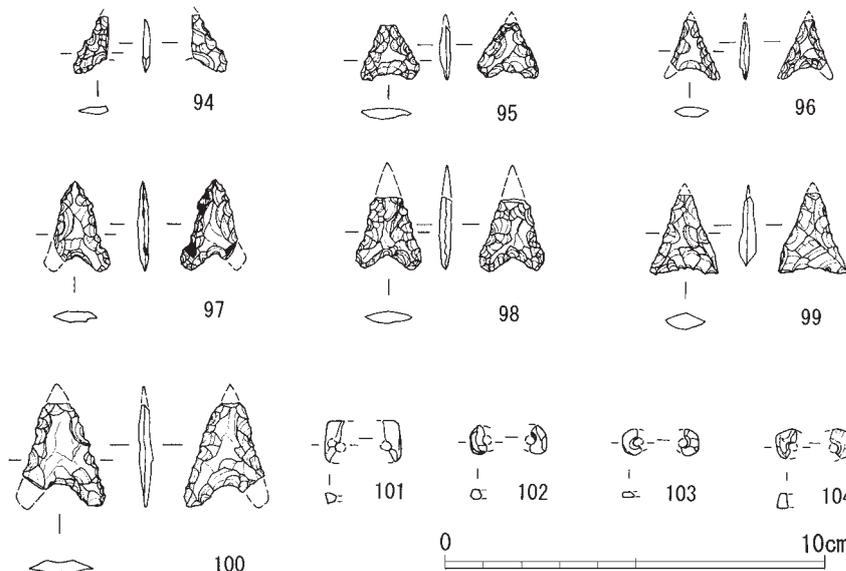
②石器(第27・28図)

石鏃は7点出土したが、すべて一部が破損している。うち4点は、2トレンチSK03・26から出土したが、火を受けているかどうかは、不明である。

94は、残存長15mm、厚さ2mm、重さ0.25gである。2トレンチSK03から出土した。95は、残存長14.5mm、厚さ2.9mm、重さ0.5gである。2トレンチSK26から出土した。96は、残存長15.5mm、厚さ2.4mm、重さ0.34gである。2トレンチ中央部分の精査中に出土した。97は長さ24mm、厚さ2.7mm、重さ0.77gである。2トレンチSK03から出土した。98は、残存長19mm、厚さ3mm、重さ0.94gである。2トレンチSK03から出土した。99は、残存長21mm、厚さ4.5mm、重さ1.21gである。2トレンチSK10から出土した。100は、残存長27mm、厚さ3.5mm、重さ1.53gである。3トレンチ排土中から出土した。

玉は2トレンチ火葬墓SK26の洗浄土から出土している。約20点出土しているが、軟質なものもあり、洗浄中に割れた可能性がある。これらのうち、穿孔が認められるものは4点あり(101～104)、加工痕が見て取れるものが1～2点ある。材質は碧玉である((5)理化学的分析 3)石材鑑定参照)。

105は磨製石斧の破片で、器壁に殴打痕が見て取れることから、叩き石に転用したものであろう。2トレンチSK26から出土した。火を受けた状態は認められない。重量は324g。106は台石で、両面に殴打痕が見て取れ、殴打痕の位置で切断されていることから、使用中もしくは使用後に破損したものと推測される。重量1500gを測ることから、台石として用いられたものであろう。1トレンチの東端部に設けたサブトレンチ内—2トレンチ崖面SX29から続く崖面を埋める土砂内から出土した。



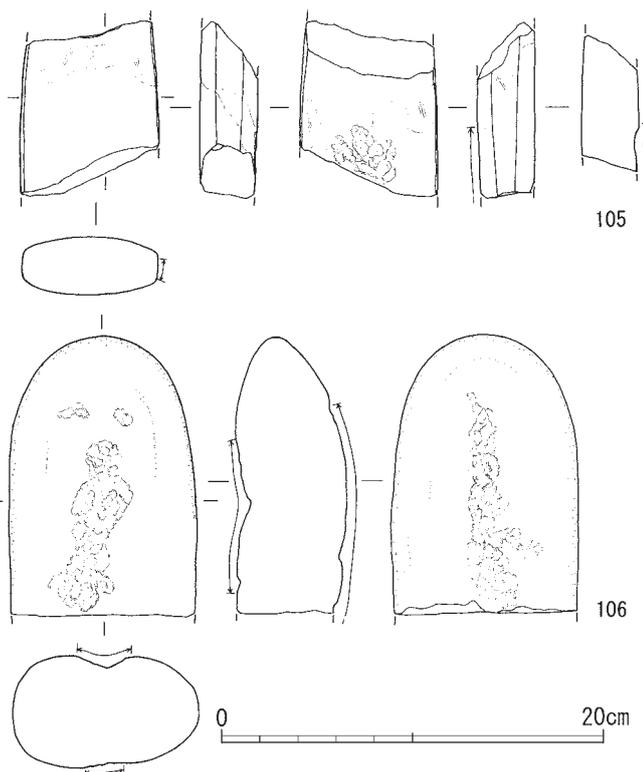
第27図 伊賀寺地区出土遺物実測図(6)

③弥生～庄内式土器(第29図)

弥生時代後期～庄内期にかけての土器が出土したのは1トレンチに限られ、竪穴式住居跡SH02・05、土坑SK13、そのほかのピット内、包含層中よりわずかに出土した。実測図に掲げたものは、

107・109・113～117が竪穴式住居跡 S H02、110～112が土坑 S K13、108が包含層中から出土した。

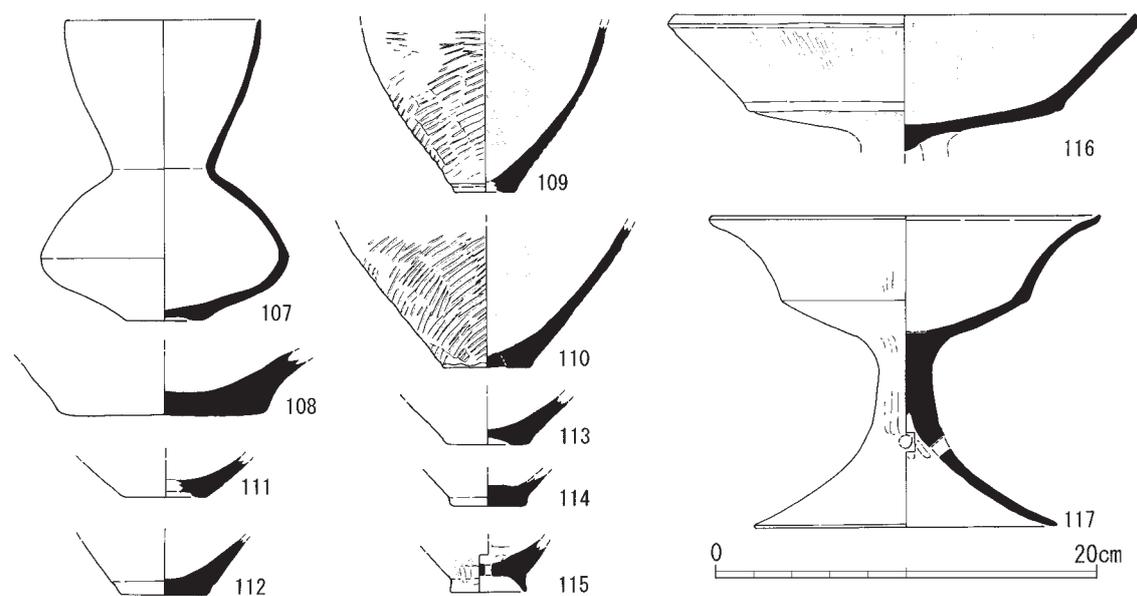
107は長頸壺で、体部下半に算盤玉状の体部を有し、「ハ」字形に開く口頸部を有する。器壁表面は摩滅のため不明である。約1/2が残存している。淡赤褐色を呈する。口径10.2cm、底径4.0cm、器高15.9cmである。竪穴式住居跡 S H02内の貯蔵穴内の中層から検出面のやや上位にかけて、小片に割れて出土した。このような出土状態から、長頸壺を破碎し、貯蔵穴を埋め戻す土砂に入れ込んだものと判断される。108は壺の底部で、外面はナデ調整が見て取れるが、内面は摩滅



第28図 伊賀寺地区出土遺物実測図(7)

のため、調整不明である。色調は外面が淡黄褐色、内面が灰白色を呈している。底径は10.5cmである。竪穴式住居跡 S H05の南西部の包含層から出土した。

109は甕の底部で、外面には細かなタタキ目、内面にはハケ目痕が見て取れる。底径は3.2cmで、淡橙褐色～黒褐色を呈する。竪穴式住居跡 S H02内の貯蔵穴内から出土した。110～112の甕底部は S K13から出土した。110は、外面には細かなタタキ目、内面にはハケ目痕が見て取れる。底径は4.5cmで、橙褐色を呈する。土坑 S K13から出土した。111は、内面上はハケメの後、ナデを



第29図 伊賀寺地区出土遺物実測図(8)

施しており、外面は縦方向のハケメが見て取れる。色調は茶褐色で、底径は4.3cmである。112は、底径4.4cmである。内面の調整は不明であるが、外面はナデで調整されている。色調は、底部外面は黒斑のために黒色を呈しているが、赤褐色～淡赤褐色である。113・114はS H02から出土したものである。113は、壺の底部で、内外面共に摩滅を受けているが、内面にはわずかにハケ状工具の痕跡が残る。土器の色調は、外面が淡赤褐色で、内面は淡茶褐色を呈する。底径4.2cmである。114は、甕の底部で、外面には縦方向のハケメがわずかに見て取れ、内面には指で押さえた圧痕が残る。色調は淡黄褐色を呈する。底径3.8cmである。

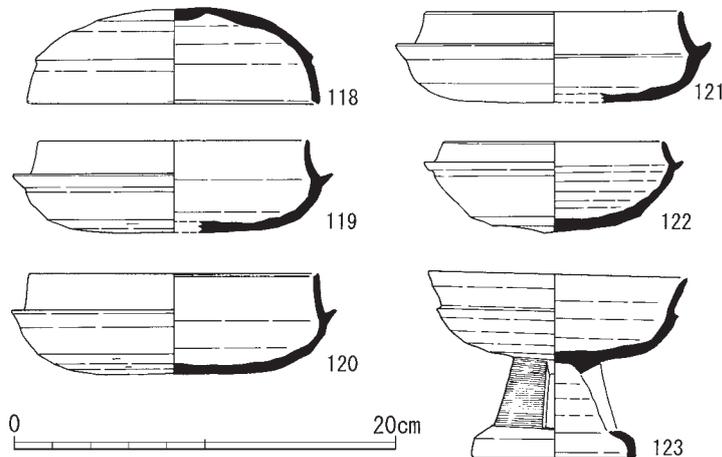
115は鉢の底部で、底部中央に竹状の工具で穿孔されている。内面には工具が当たった痕跡が見て取れるが、内外面共にナデ調整で器壁を調整している。底径3.8cmで、褐色～灰白色を呈する。S H02から出土した。

116は高杯の杯部で、杯部の1/2が残存している。脚柱部等の破片も残るが、図化できない。口径は24.3cmで、灰白色を呈している。107・109と同じく、竪穴式住居跡S H02内の貯蔵穴内及びその周辺から出土した。117は高杯で、杯の体部は斜め上方に大きく開き、口縁部は「く」字に屈曲して外反し、器壁のほぼ全面が摩滅を受けているが、脚柱部～杯部下半部にかけては縦方向のヘラミガキがわずかに残る。全体の約1/3の破片が出土した。口径20.4cm、底径15.9cm、器高16.4cmである。色調は淡黄褐色である。竪穴式住居跡S H02の西半部の床面およびやや上面からほぼ全体にわたる破片が出土していることから、竪穴を埋める際に破碎したものと判断される。

④須恵器

須恵器の出土もわずかであり、2トレンチ溝S D05から出土したもの(118～122)と2トレンチのピットS P18から出土したもの(123)がある。前者はT K10、後者はやや古くMT15～T K10に相当する。

118は、杯蓋で、口径15.2cm、器高5.1cmである。119は杯身で、口径14.2cm、器高4.9cmである。120は杯身で、口径15.2cm、器高5.3cmである。121は杯身で、口径13.3cm、器高4.8cmである。122は杯身で、口径11.4cm、器高4.85cmである。123は高杯で、口径13.6cm、器高9.4～9.8cmである。スカシは3方向に開けられている。



第30図 伊賀寺地区出土遺物実測図(9)

3)小結

伊賀寺地区の調査では、縄文時代中期末の竪穴式住居跡と縄文時代後期の竪穴式住居跡、土壙墓、火葬墓を検出した。

火葬墓S K03・26は死後すぐに焼かれた人骨であることが判明した。縄文時代の火葬骨は、死後数年後に土壙墓を掘り返し、肉を焼ききったものと考えられており、

今回の事例はその評価に再考を促すものである。その詳細については先に報告したところであり、参照されたい。^(注8)

縄文土器は主として2・3トレンチで出土した。大まかには、3トレンチで出土したものは北白川C式2～3期、2トレンチ出土のものは元住吉山式～宮滝式の年代観が与えられる。3トレンチ出土の土器は、竪穴式住居跡SH20床面と判断される状況で出土しており、炉跡SK19の廃棄時に埋められた土器群とともに、一括性が高いものと理解できる。しかし明らかに第25図72のように元住吉山～宮滝式のものも混じっている。

3トレンチの北東側では、府道新設工事のため、長岡京跡右京第941次調査が実施されており、元住吉山～宮滝式期と北白川C式期の遺構が見つまっている。そのため、今回の調査地で認められるように、2トレンチ＝元住吉山～宮滝式期＝調査地南半、3トレンチ＝北白川C式期＝調査地北半というように、明瞭に生活空間を分けていたのではない。北白川C式期の遺構は2トレンチでは確認できていないため、2トレンチより南には集落が広がっていなかった可能性はあるが、少なくとも元住吉山～宮滝式期の遺構も本来は3トレンチにも広がっていたと理解するべきであろう。竪穴式住居跡SH20の竪穴がほぼ消失して検出されたことから、本来は北白川C式期と元住吉山～宮滝式期の遺構は重複していたのが、後世に竪穴式住居の深さ分が削平されたため、ほとんどの元住吉山～宮滝式期の遺構が消失してしまったため、北白川C式期の遺物ばかりが出土したのであろう。竪穴の上から掘り込まれた元住吉山～宮滝式期の遺構の中でも深いものだけが消失から免れ、北白川C式期の遺物に混じって出土したと考えられる。

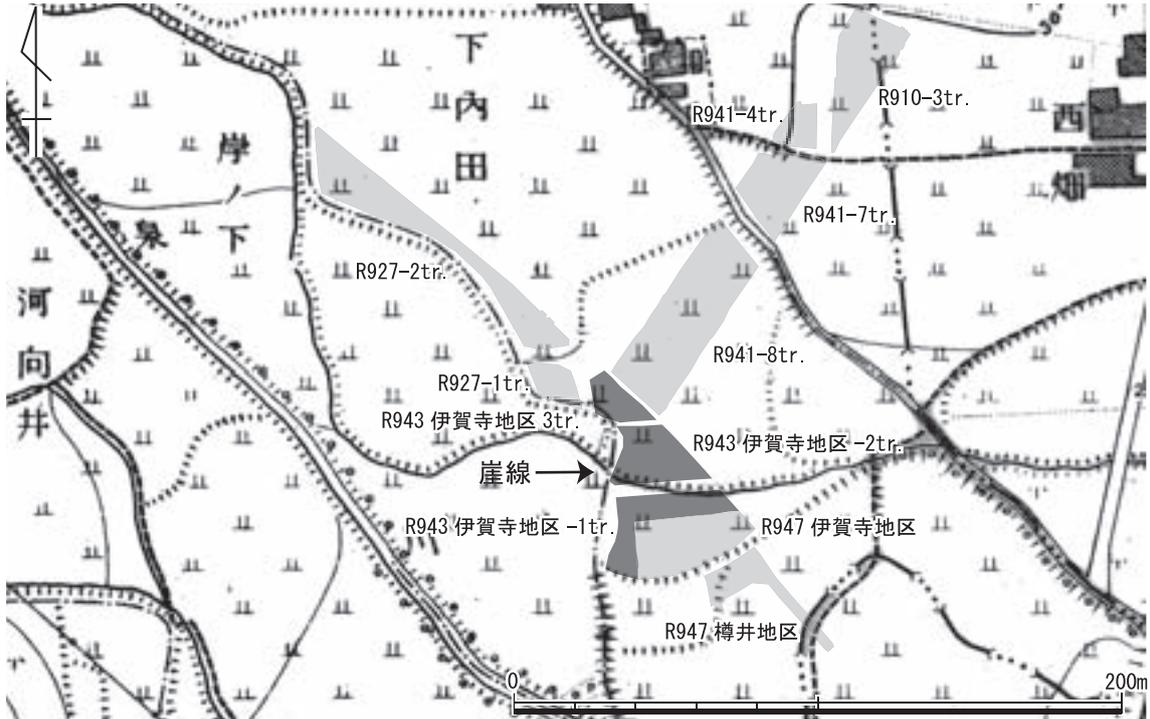
一方、2トレンチでは元住吉山式～宮滝式の時期に限定される。これは環境の変化—例えば河川の移動に応じて、中期末と後期後葉で集落の占地場所が変わったのか、本来は中期末の集落が3トレンチにも展開していたのが、後期後葉段階までに河道の移動ために削平を受けてしまったのか、わからない。

2トレンチで検出した遺構の状況からは、縄文時代の遺構は1トレンチにも広がっていく様相を呈するにも関わらず、1トレンチでは縄文時代の遺構が見つからない。しかも、1トレンチの第6層下面は庄内期の遺構面であり、2トレンチの縄文時代遺構検出面とはほぼ同じ高さである。以上のことから、1トレンチでは広範囲に縄文時代の遺構が削平されているものと推測される。

また、1・2トレンチでは崖面を確認した。この崖面は元住吉山～宮滝式期の土器を含む埋土で埋まっている。崖面SX29を東側に延長すると、1トレンチ東端部の断ち割り内で検出した崖面に合致し、2トレンチ西南部分および1トレンチ北端にかけて、ほぼ東西に連なるものである。この崖面より南側で広範囲に縄文時代後期の遺構が削平を受けていることが想定される。遺構面の存否の状況から、縄文時代後期～庄内段階のある段階の小泉川流路痕跡と理解した。この崖面に相当する落ち込みラインは、明治30年前後の仮製地図に描かれている。

(2) 樽井地区試掘(第2・32図)

1) 調査の概要

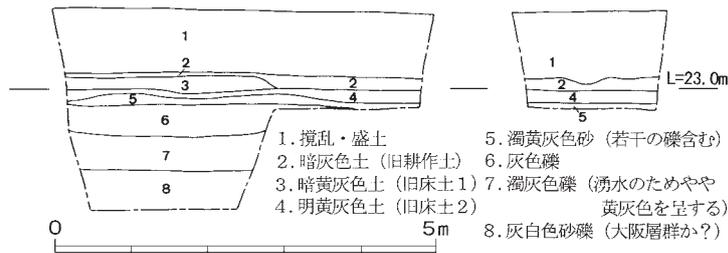


第31図 仮製地図に表れた崖線

樽井地区は長岡京市友岡樽井地内にあり、伊賀寺地区の南東約150mにある。この対象地は長岡京跡右京七条三坊十二町(八条三坊十町)に位置する。調査は7月22・23日に実施し、調査面積は10㎡である。

試掘対象地の南西約70mでは、右京第799次調査で試掘調査がなされており、中世以前には土地利用がなされていないか、もしくは、なされていたとしても小泉川により広範囲に削平を受けているものと推定されている。

樽井地区では、2×5mのトレンチを設定して、試掘調査を行った。現地表は標高24mで、以下、攪乱・盛土が80cm、旧耕作土・旧床土が30～35cm堆積しており、その下位に濁黄灰色砂(厚さ15cm)、灰色礫(厚さ40cm)、濁灰色礫(厚さ45cm)、その下に灰白色砂礫が50cmの厚さにわたって堆積しているのを確認した。6層より下は、湧水が甚だしく、トレンチ壁面が崩落する危険もあったため、層序の記録と観察を行った上で、すぐに埋め戻した。第5～7層は締まりがなく、若干の土師器・須恵器などの土器片を含んでおり、小泉川の旧流路内の堆積土砂と判断した。灰白色砂礫はこれより上位の砂礫より固く締まっており、小泉川の氾濫源のベースとなる大阪層群と判断される。



第32図 樽井地区土層断面図

と判断される。

2) 小結

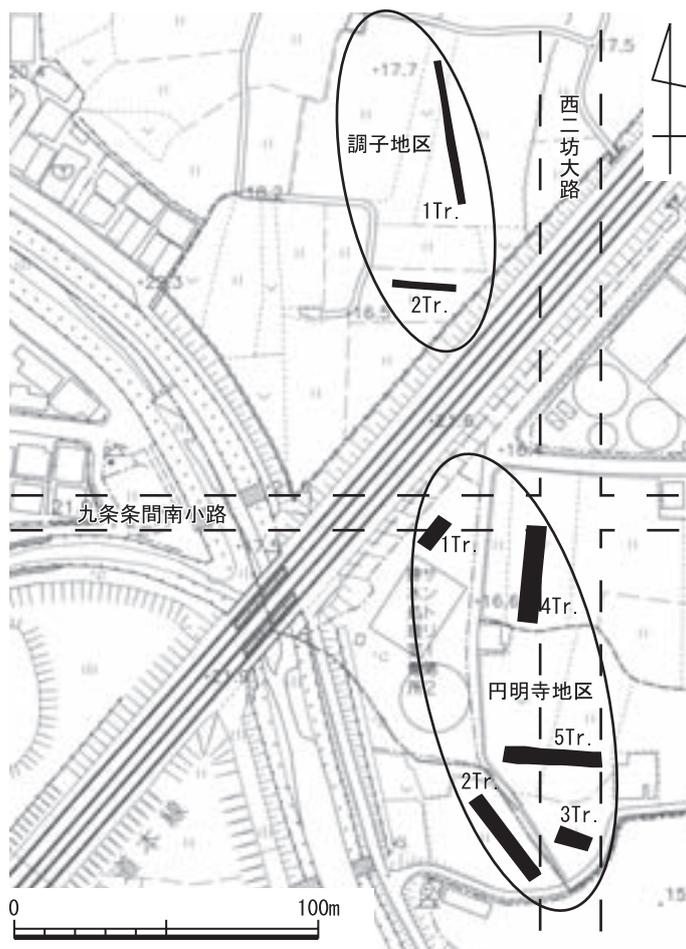
過去の周辺調査の結果と総合すると、樽井地区周辺では中世段階まで小泉川の氾濫源であり、顕著な遺構は遺存していないものと判断された。(岩松保)

(3) 調子地区試掘(第33・34図)

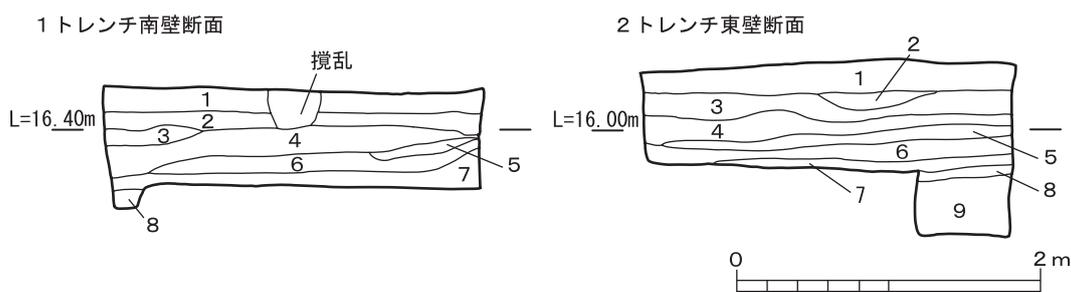
長岡京市調子2丁目地内に2か所の調査トレンチを設定した。本試掘地周辺では平成17年度にも8か所のトレンチで試掘調査が実施された^(注10)。今回の調査対象地に隣接する平成17年度調査の第2トレンチでは、弥生時代の土器を多く含む流路が検出されたため周辺に、同じ時代の遺構が広がる可能性があった。

第1トレンチは長さ40m、幅2.5mのトレンチである。耕作土直下は、洪水性の堆積物が繰り返してあらわれ、安定した遺構面は存在していなかった。出土遺物には、奈良・平安時代の須恵器・土師器があるが摩滅を受け、再堆積したものと考えられる。

第2トレンチは長さ30m、幅



第33図 円明寺・調子地区調査トレンチ配置図



1. 耕作土
2. 褐灰色粘砂 (10YR5/1)
3. 灰色粘砂質土 (7.5Y4/1)
4. 灰黄褐色砂質土 礫混じり (10YR4/2)
5. 黄灰色砂混シルト (2.5Y4/1)
6. 褐灰色粘砂質土 (10YR4/1)
7. 黄褐色シルト混砂層 (2.5Y5/3)
8. 黄灰色シルト (2.5Y4/1)

1. 耕作土
2. 黄灰色砂質土 (2.5Y4/1)
3. 灰色礫混砂質土 (5Y4/1)
4. 灰黄褐色礫混砂質土 (10YR4/2)
5. 黄灰色砂層 (2.5Y5/1)
6. 灰黄褐色シルト混砂質土 (10YR5/2)
7. 暗灰黄色砂質シルト (2.5Y5/2)
8. 灰色砂質シルト (5Y4/1)
9. 灰黄褐色砂礫 (10YR5/2)

第34図 調子地区土層断面図

2.5mのトレンチである。平成17年度調査の弥生時代と古墳時代初頭の流路の延長上に設定したが、確認できなかった。耕作土下には洪水性堆積物が続き、中には平安時代の遺物が含まれる。新しい洪水によって流路が破壊され残っていないものと考えられる。

(中川和哉)

(4) 円明寺地区試掘

円明寺地区の調査対象地は長岡京右京九条三坊四町、西二坊大路、九条条間南小路推定地付近に所在し、また、長岡京市調子3丁目に所在する^{はざま}裕遺跡と乙訓郡大山崎町字円明寺小字松田に所在する松田遺跡にまたがっている。今回の調査では5か所のトレンチを設定して調査を行った。そのうち、2トレンチが長岡京跡右京第939次・松田遺跡、1・3～5トレンチが長岡京跡右京第940次・裕遺跡にあたる。

1) 長岡京跡右京第939次・松田遺跡

小泉川に平行して長さ約30m、幅約5mの2トレンチを設定した。現地表面の標高はトレンチ北西隅が14.78m、南東隅が14.60mでほぼ水平である。表土の下には層厚約0.2mの茶灰色礫層が広がる。トレンチ南東部約4/5ではこの下に青灰色シルト混じり礫が堆積している。標高約14.3mの青灰色シルト混じり礫の上面で遺構検出に努めたが、遺構は認められなかった。この下には赤茶色礫層があり、断ち割りを行ったところ磨滅の著しい平瓦片が1点出土したが、絶え間なく水が湧き、調査は困難であった。

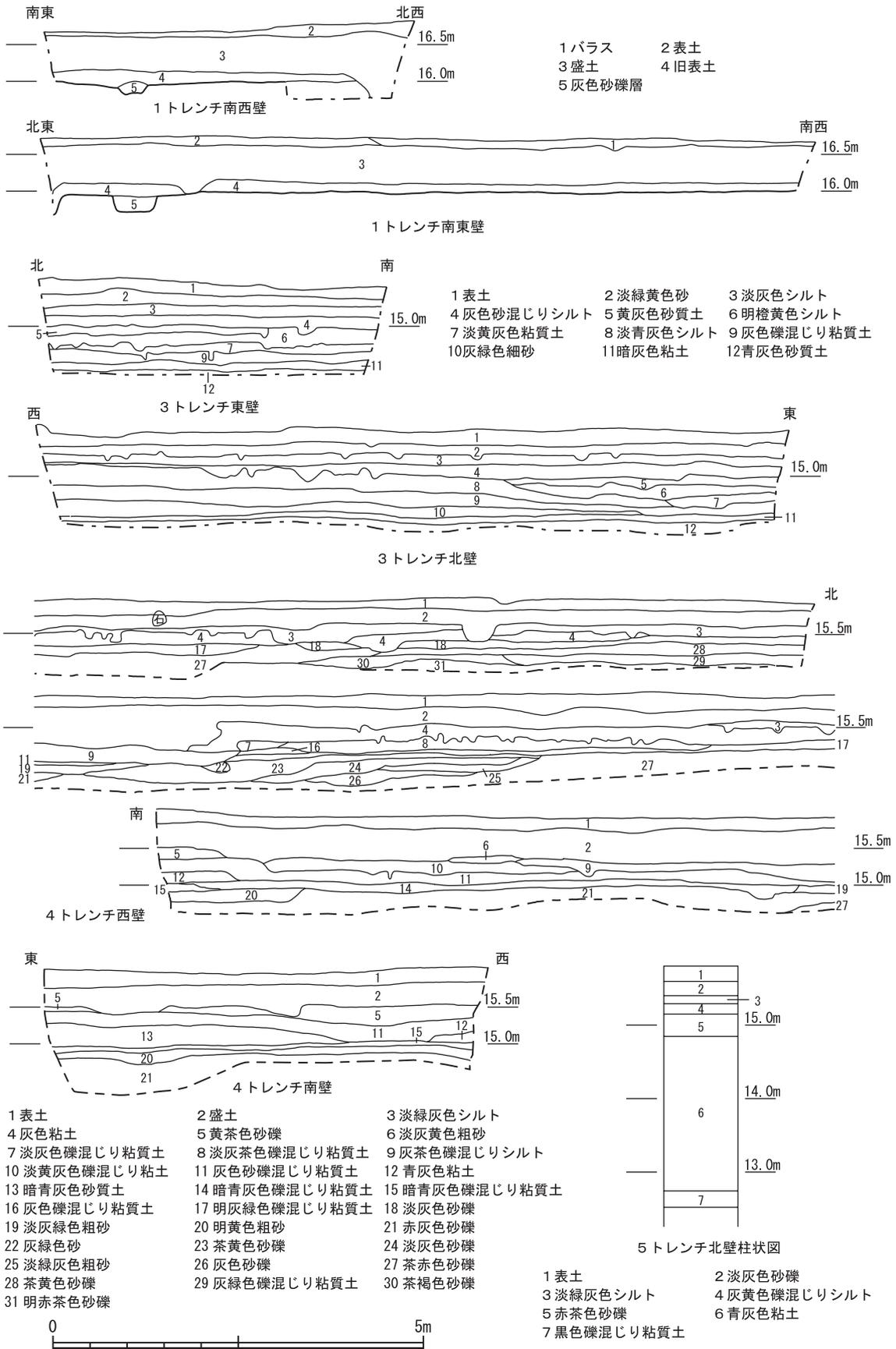
2) 長岡京跡右京第940次・裕遺跡

① 調査概要

1 トレンチ サントリー京都ビール工場内に設定した5m×10mのトレンチである。バラスと表土の下には礫を含む黄色系の盛土が約0.5m均一に堆積している。これは、1977年にサントリーの排水処理施設が造られた時の盛土と考えられる。その下には旧表土(耕土)がそのまま残っており、これを除去すると、地山面上に正方位を向いた耕作に関連する溝が現れた。溝の中にはビニル紐などが入っており、1977年まで耕作されていた畑に伴うものと判断される。

3 トレンチ 5m×10mのトレンチである。表土・淡緑黄色砂・淡灰色シルト・灰色砂混じりシルト(1～4層)がほぼ水平に堆積し、その下に淡青灰色シルト(8層)が堆積するが、この上面は小泉川から遠ざかるにしたがって低くなっていく。この面で遺構検出を試みたが、遺構は認められなかった。北東辺と南東辺に沿ってL字形にサブトレンチを入れたところ、淡青灰色シルトから中世前期とみられる土師器皿の小片が出土した。

4 トレンチ 6m×30mのトレンチである。西壁で土層の堆積状況を見ると、表土の下に認められる盛土層の厚さが、トレンチの北約2/3では約0.5m前後であるのに対して南約1/3では1.0m前後とほぼ倍になっており、盛土以前は、調査区の南約1/3が約50cm低かった事がわかる。盛土より下の土層は南に向かって下がる傾斜を基本とする。調査区の北約2/3には盛土の下に均質な淡緑灰色シルト(3層)・灰色粘土(4層)と淡灰茶色礫混じり粘質土(8層)が堆積しているが、南約1/3ではこれらの層が存在せず、削平されたものと思われる。前述の約50cmの比高差は、この



第35図 円明寺地区土層断面図・柱状図

削平によって生じたものと考えられる。灰色粘土からは明の青花椀が出土した。

この下には灰色系のシルトや粘質土(9～11層)、青灰色系の粘質土など(12～15層)が薄い層状に堆積するが、調査区の北約1/4にはこれらの層が認められない。

平面的にみれば、これらの層は北北西から南南東に向かって下がる傾斜で堆積しており、小泉川の旧流路の一部にあたっている可能性が考えられる。これらの層からは、弥生土器、須恵器杯B・甕、灰釉陶器、瓦器椀、土師器杯・皿、白磁椀・皿、青磁椀、室町時代の瓦質土器などのほか、銭貨(祥符通寶)、銅製刀装具(切羽)が出土した。出土遺物から、室町時代の堆積層とみることができるとができる。

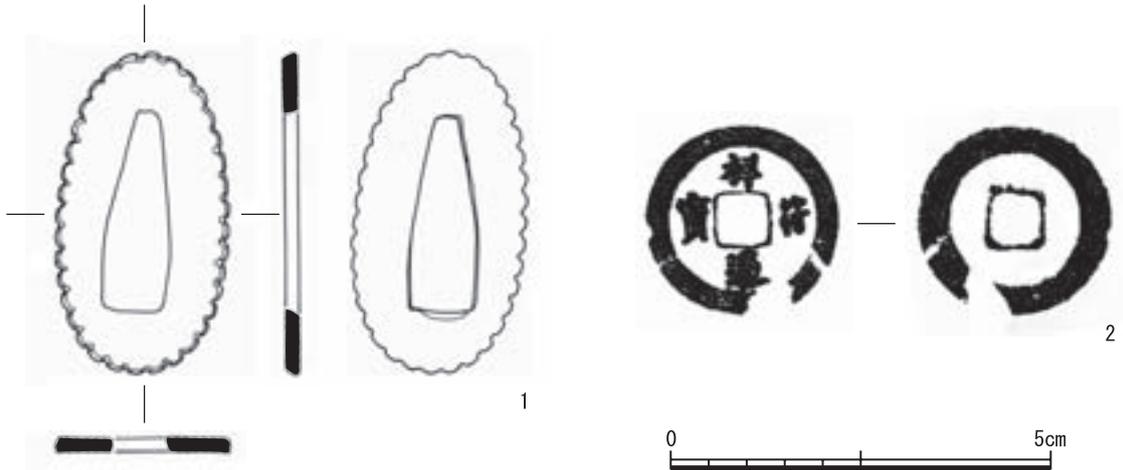
さらに下層には、礫層(18層～)が堆積する。礫層の上面の標高は調査区北端で約15.5m、調査区南端で14.9mと、南北30mの間で南が約0.6m低くなっている。一部を重機によって断ち割ったところ、わずかの掘削で湧水が激しくなり、少なくとも現地表下3.5m付近までは礫層が続くことを確認したのみで、断面図の作成などは不可能であった。礫層の上部からは須恵器杯B・椀・甕、土師器皿、黒色土器椀、瓦器椀、瓦、銭貨などが出土したことから、鎌倉時代に堆積したものと考えられる。重機掘削の廃土から土師器小片を確認したのみで、時期のわかる遺物は出土しなかった。

5トレンチ 6m×30mのトレンチである。表土の下には淡灰色砂礫、淡緑灰色シルト、灰黄色礫混じりシルト、赤茶色砂礫が堆積する。この赤茶色砂礫は、角礫を含むこと、粒度がそろっていないことなどから、客土の可能性が考えられる。その下に堆積する青灰色粘土の上面で精査したが、遺構は認められなかった。青灰色粘土層からは、土師器皿、瓦器椀、瓦質土器などの小片が出土した。青灰色粘土層の一部を重機によって断ち割ったところ、標高12.75m付近で現れる黒色礫混じり粘質土まで青灰色系の粘質土が続く。途中で礫混じりの層や灰色の強い層があって何層かに分かれるものと思われるが、表土直下の淡灰色砂礫からの湧水の激しい流入によって壁面が崩落し、断面図の作成は不可能であった。重機による断ち割りでは遺物は認められなかった。

出土遺物(第36図) 1は4トレンチ暗青灰色礫混じり粘質土から出土した銅製刀装具の切羽である。長さ43mm、幅23mm、厚さ2mmを測る。外縁部は花卉状に加工されている。表面は水平方向の研磨痕がみられるが、鏝に接する面には特に調整を施さない。茎穴は27mm×9.5mmを測る。2は4トレンチ側溝の暗青灰色礫混じり粘質土から出土した祥符通寶である。径2.51cm、厚さ0.8mmを測る。

②まとめ

長岡京跡右京第939・940次調査では、小泉川に近いトレンチほど湧水が激しく、小泉川から離れたトレンチでも小泉川に平行する方向の堆積土が確認され、全体に小泉川の旧流路にあたっている可能性が考えられるが、4トレンチでは下層に砂礫層が厚く堆積しているのに対して、5トレンチでは下層に粘質土が厚く堆積しているなど、堆積土の様相は複雑であることが判明した。顕著な遺構は検出されなかったものの、出土遺物からみて、これらの層の形成が鎌倉時代以降で



第36図 円明寺地区出土遺物実測図

あることが判明するなど、周辺の地形の変遷を考えるうえで貴重な知見が得られた。

(森島康雄)

(5) 理化学分析

1) 人骨の鑑定

京都府長岡京市に所在する伊賀寺遺跡の発掘調査において縄文時代後期の火葬墓SK03と火葬墓SK26より焼骨が出土し、発掘現場で取り上げられた後、肉眼解剖学的調査を行った。焼骨は断片的なものが多く、1 cmに満たない破片については人骨か獣骨であるのか同定することは困難であったが、2～3 cm程度の小断片では人骨と同定できるものが確認できた。人骨は、灰白色や白色になるまで焼かれており、収縮や変形が目立つ。それぞれの土壌ごとに人骨の残存状況、性別、死亡時の年齢、病変など特記事項、焼成についてその所見を報告する。

① 火葬墓SK03

<残存状況>

出土した人骨は断片的に残存しており、いずれも焼かれたものばかりである。人骨は、頭蓋骨から足の指骨までほぼ全身の骨を確認できるが、小さな断片や破片となり、保存状態は良くない。歯牙も数点残存しており、いずれもエナメル質が脱落し、象牙質が露呈した状態である。残存骨には数点の重複部位が確認でき、最も多かったのは下顎骨右側の歯槽部分で9点重複している。頭蓋骨の他の部位では、左側頭骨の外耳道周辺部分が7点、下顎骨右側の関節突起が7点、下顎骨オトガイ部分が6点重複しており、頭蓋骨以外の部位では、左肩甲骨関節窩から烏口突起周辺にかけての部分が6点、上腕骨の遠位端、尺骨と橈骨の近位端、膝蓋骨でも3点から4点重複している。特に下顎骨で重複する部分がよく残っているようである。また、これら重複する骨よりもさらに若い子供の軸椎や尺骨が残ることから、火葬墓SK03には少なくとも10体分の人骨が残ると考えられる。

<性別>

残存する部位がいずれも断片的であり、焼成による骨の収縮や変形があるため、性別を確実に

判別できる部位は確認できない。しかし、眉上隆起が発達した前頭骨、外後頭隆起が発達した後頭骨、厚く大きな胸骨柄、骨体が太く三角筋付着部の発達した上腕骨が確認できることから、これらの特徴を持った骨については男性の遺骨の可能性が考えられる。一方、眼窩上縁が鋭い前頭骨、外後頭隆起の発達が弱く薄い後頭骨、華奢な頬骨、細く華奢な上肢骨が確認できることから、これらの特徴を持った骨は、女性のものである可能性が高い。いずれの骨についても保存状態が悪いため、性別に関しては可能性を示すだけであるが、男女の骨が残存するようである。

<死亡時の年齢>

大多数の骨は成人のものであり、数点のみ子供の骨を確認できる。成人骨の中で詳細な死亡時の年齢を推定できるものは数点のみしかない。ひとつは寛骨の破片で、仙骨との関節部分である耳状面の形態から壮年(25~40歳)程度の人のものと判明した。他には数点の頭蓋骨片があり、縫合線の内板部分のみが癒合しているのを確認できたことから、壮年以上の人の遺骨と推測できる。子供の骨では、下顎骨、軸椎、尺骨それぞれの小断片3点から死亡時の年齢を推定できた。下顎骨は関節突起のみが残り、そのサイズから10代後半あたりと推定できる。軸椎は左椎弓から棘突起部分が残る。棘突起が癒合済みであることから3~4歳に達していたことがわかる。さらに、3~4歳の個体の軸椎と比較するとサイズがかなり小さくなっていることから、焼かれたことで大きく収縮したと考えられるので、3~4歳からそれほど経過しない年齢、およそ4歳前後あたりで死亡したと推定する。尺骨は右の近位関節部分のみが残る。この関節部分のサイズは新生児並みであるが、滑車部分の形態が新生児のそれよりも明瞭であることからより発育が進んだ段階にあると考えられ、およそ1歳前後に達していた可能性がある。さらに、焼成による骨のサイズの収縮も考慮する必要がある。骨の収縮率に関してはいくつかの見解があり、最小で0%、最大で30%台の収縮率とある(池田,1981; Thompson,2005)。そこで、滑車部分の長さを基準にして30%収縮した場合を想定すると、収縮前の骨のサイズは5歳程度の幼児のサイズに相当する。よってこの尺骨は、1歳前後から5歳程度までの間に死亡した幼児の骨と考えられる。他に子供の骨と同定できるものは確認できなかったが、子供の骨は成人骨よりも脆く壊れやすいので、多量に残存する破片の中に含まれている可能性は十分ある。

<病変など特記事項>

病変として、変形性関節症の疑いがある下顎骨関節突起の小断片を2点確認できる。左右それぞれ1点ずつあり、両方ともに関節部分が前後方向に薄くなり変形している(図版第19a・b)。他に病変は認められなかったが、多くの骨が焼成により変形し破片となっていることから、他にも病変や損傷などがあった可能性は否定できない。

特記事項として、生前における歯牙の脱落痕をあげられる。下顎骨の切歯から小白歯までの歯槽部分で一部または大部分が吸収されて閉鎖しているのを確認できる。これらは3個体分確認でき、1体は中切歯からおそらく第1小白歯までの歯槽、2体目は切歯部分と思われる歯槽、3体目は犬歯と第1小白歯部分の歯槽が閉鎖している。歯槽の閉鎖は、生きている間に何らかの理由で歯が脱落し、その部分の歯槽が吸収されて生じる。歯の脱落理由は分からないが、縄文人の抜

歯風習はよく知られる所であり、これら下顎骨の歯槽閉鎖も風習的な抜歯によるものかもしれない。

<焼成>

人骨の断片や破片を観察すると、変形しているものが数多く確認できる。骨表面に深い亀裂が入り、頭蓋骨などの扁平骨は反り返り、長骨では長軸方向や横方向の輪状の割れやよじれが生じている(図版第19下段骨)。焼成による人骨の変化についてStewart(1979)や池田(1981)を参考にすると、上述の火葬墓SK03の人骨に見られる変形は、軟部組織が残る新鮮骨の状態では焼かれたことにより起こったと考えられる。また、焼成温度の違いによる骨の色調変化についてBuikstraとUbelaker(1994)は、比較的低い温度(200℃から300℃)で焼かれた骨は茶色や黒色であるが、高温(800℃)で焼かれた骨は青灰色や白色になると指摘する。さらに、歯牙において焼成温度が約500℃以上になると、エナメル質部分が剥離し象牙質が露呈した状態となる(Buikstra and Goldstein, 1973)。火葬墓SK03の人骨の色調は、灰白色や白色を呈しており、残存する数本の歯ではエナメル質が全て脱落し、象牙質が露呈した状態であることから、詳細な焼成温度は定かでないが高温で焼成したと考えられる。以上のことから、火葬墓SK03から出土した人骨は、死後それほど経過する間もなく、高温で火葬されたと想定できる。

②火葬墓SK26

<残存状況>

焼かれて変形した人骨が断片的に残る。小さな破片となって残る骨が大半で同定できるものは少ないが、土ごと取り上げられた骨は大きな断片状で残るためかろうじて形がわかる。残存する部位は、頭蓋骨、下顎骨、肋骨、椎骨、肩甲骨、四肢長骨、手骨、足骨とほぼ全身の骨を確認できるがいずれも部分的にしか残らない。また、いずれの骨にも重複する部位はなく、別個体と考えられるような異なった特徴をもつ部位も確認できないことから、少なくとも1個体分の人骨があるといえる。

<性別>

性差を顕著に示す部位が残らないため不明。

<死亡時の年齢>

詳細は不明であるが、子供の骨と思わせるようなものは確認できず、四肢長骨では骨端の癒合が完了し、骨体のサイズが大人並みに大きいことから成人の遺骨が残存することは確認できる。

<病変など特記事項>

病変や損傷などは認められない。破片状のものが多く、変形も著しいので、検出できないだけかもしれない。

<焼成>

四肢長骨では長軸方向や横方向の深い亀裂、捩れが認められ、頭蓋骨や肩甲骨などの扁平骨や椎骨の表面にも深く亀裂が入っている。また、骨の色調は灰白色や白色に変色している。こうした特徴から、火葬墓SK26の遺骨は、軟部組織が残る新鮮骨の状態にあるとき、すなわち死後そ

れ程時間が経たないうちに高温で焼かれたと推測できる。

③まとめ

火葬墓 S K03ならびに S K26から出土した人骨は、いずれも死後まもなく軟部組織が残る状態のときに高温で火葬された人の遺骨と推測できる。また、火葬墓 S K03においては、少なくとも10体分の人骨が存在し、成人男女ならびに約5歳以下の幼児や10代後半の子供の遺骨が残る可能性を指摘できた。さらに、火葬墓 S K26においては、少なくとも1体分の成人の遺骨が残ることが判明した。

(京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室・大藪由美子)

<参考文献>

Buikstra J.E. and Goldstein L. (1973) The Perrins Ledge Crematory. Illinois State Museum Reports of Investigations, 28:1-40.

Buikstra J. E. and Ubelaker D. H. (1994) Postmortem Changes: Human Taphonomy. In: Buikstra J. E. and Ubelaker D. H. (eds.), Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains: Arkansas Archeological Survey Research Series No.44. Arkansas, pp.95-106.

池田次郎 (1981) 出土火葬骨について. 『太安萬侶墓』 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書, 43: 79-88.

Stewart T. D. (1979) Burned Bones. In: Thomas C.C. (ed.), Essentials of Forensic Anthropology. Springfield, pp. 59-68.

Thompson T. J. U. (2005) Heat-induced Dimensional Changes in Bone and their Consequences for Forensic Anthropology. Journal of Forensic Sciences, 50(5): 1-8.

2) 放射性炭素年代推定

①測定対象試料

伊賀寺遺跡は、京都府長岡京市下海印寺下内田地内に所在する。測定対象試料は、2 tr. S K03 注口土器内の土壌から出土した炭化物 (No.1 : IAAA-81011)、2 tr. S K26から出土した炭化物 (No.2 : IAAA-81012) である。

②測定の意義

火葬墓 S K03と S K26の前後関係や同時性を確認する。出土遺物から、ともに縄文時代後期と判断される。

③化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

(2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理 (AAA : Acid Alkali Acid) により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80℃) を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80℃) を用いて数時間処理した後、

超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。

(3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。

(4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素(CO₂)を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイトを作製する。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

④測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

⑤算出方法

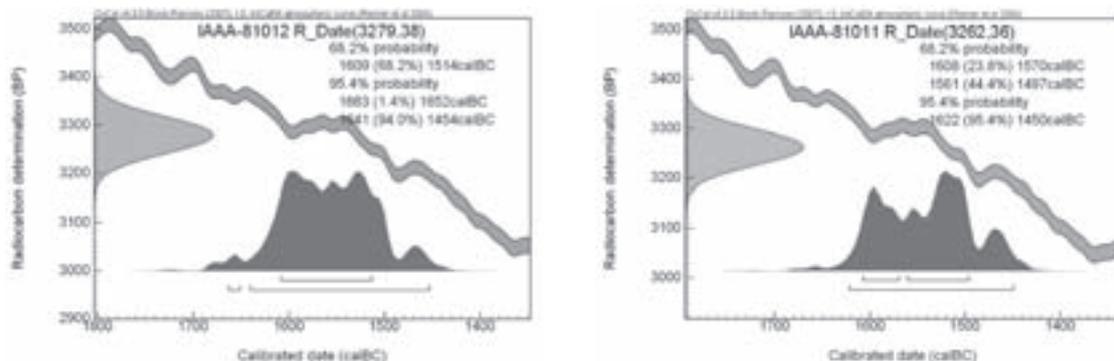
(1) 年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polash 1977)。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age:yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により¹³C/¹²Cを測定した場合には表中に(AMS)と注記する。

(4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。

(5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C年代に対応



第37図 暦年較正年代グラフ

する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差(1σ=68.2%)あるいは2標準偏差(2σ=95.4%)で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.0較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

⑥測定結果

¹⁴C年代は、S K03注口土器内から出土した炭化物(No.1: IAAA-81011)が3260±40yrBP、S K26から出土した炭化物(No.2: IAAA-81012)が3280±40yrBPである。2点は誤差範囲内で一致し、同時期の所産と判断される。暦年較正年代(1σ)は、No.1が1608~1570BC(23.8%)・1561~1497BC(44.4%)、No.2が1609~1514BC(68.2%)である。2点の炭素含有率は共に60%以上であり、十分な値であった。また、化学処理および測定内容にも問題が無く、縄文時代後期と予想された調査所見とも整合的であることから、妥当な年代と考えられる。

((株)加速器分析研究所)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ¹³ C(‰) (AMS)	δ ¹³ C補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC(%)
IAAA-81011	No.1	2tr,SK03 注口土器内 土壌	炭化物	AAA	-25.91±0.88	3,260±40	66.62±0.30
IAAA-81012	No.2	2tr,SK26	炭化物	AAA	-24.64±0.95	3,280±40	66.48±0.31

[#2400]

測定番号	δ ¹³ C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age(yrBP)	pMC(%)			
IAAA-81011	3,280±30	66.50±0.28	3,262±36	1608BC- 1570BC (23.8%) 1561BC - 1497BC (44.4%)	1622BC - 1450BC (95.4%)
IAAA-81012	3,270±40	66.53±0.29	3,279±38	1609BC - 1514BC (68.2%)	1663BC - 1652BC (1.4%) 1641BC - 1454BC (94.0%)

[参考値]

参考文献

Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

3) 石材鑑定

はじめに

今回の分析調査では、伊賀寺遺跡の発掘調査で検出された縄文時代後期後半の墓坑から出土した玉類の石材の種類を特定することを目的として、薄片作製観察を行った。

①試料

縄文時代後期後半の墓坑(S K 26)からは、穿孔加工痕のある玉製品とその材料として利用されたとみられる石材破片が水洗選別により抽出されている。今回の分析は破壊分析になることから、調査担当者と協議の上、抽出された石材破片のうち、肉眼的に玉製品と同質と判断される石材破片を選択し、分析用試料とすることとした。分析に供した試料の状況は写真撮影を行い図版として示した。なお、S K 26洗浄土の細片試料は、肉眼観察では頁岩、チャート、緑色千枚岩、緑色岩、碧玉が確認された。

②分析方法

薄片の顕微鏡鑑定は、岩石を0.03mmの厚さに薄く研磨し、顕微鏡下で観察すると、岩石を構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

試料は微小のため、エポキシ系樹脂により包埋処理を施し、薄片用のチップとする。#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で研磨した後、そのチップをプレパラートに貼り付ける。プレパラートに貼り付いたチップをダイヤモンドカッターにて薄く切断した後、切断面を#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった岩石薄片の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を用い、下方ポーラーおよび直交ポーラー下において観察・記載を行う。

③結果

偏光顕微鏡下の観察では岩石の構成鉱物および組織の記載岩石学的な特徴を明らかにした。各構成物の量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量(>50%)、中量(20～50%)、少量(5～20%)、微量(<5%)およびきわめて微量(<1%)という基準で目視により判定した。顕微鏡鑑定に際しては下方ポーラーおよび直交ポーラー下で撮影した写真を添付した。以下に各試料の観察記載結果について述べる。

岩石名：石英-緑泥石-セリサイト岩

岩石の組織：交代状組織(replacement texture)

原岩の組織が完全に消滅している変質交代岩である。

主成分鉱物

セリサイト：多量存在し、粒径最大0.15mmの他形で不定形板状～繊維束状を呈し、弱い配向性を示して広範に分布する。

緑泥石：中量存在し、粒径最大0.12mmの他形で繊維束状を呈し、淡緑色を示す。セリサイトと共生して広範に分布する。肉眼的に緑色を呈する部分において粗粒なものが分布する。

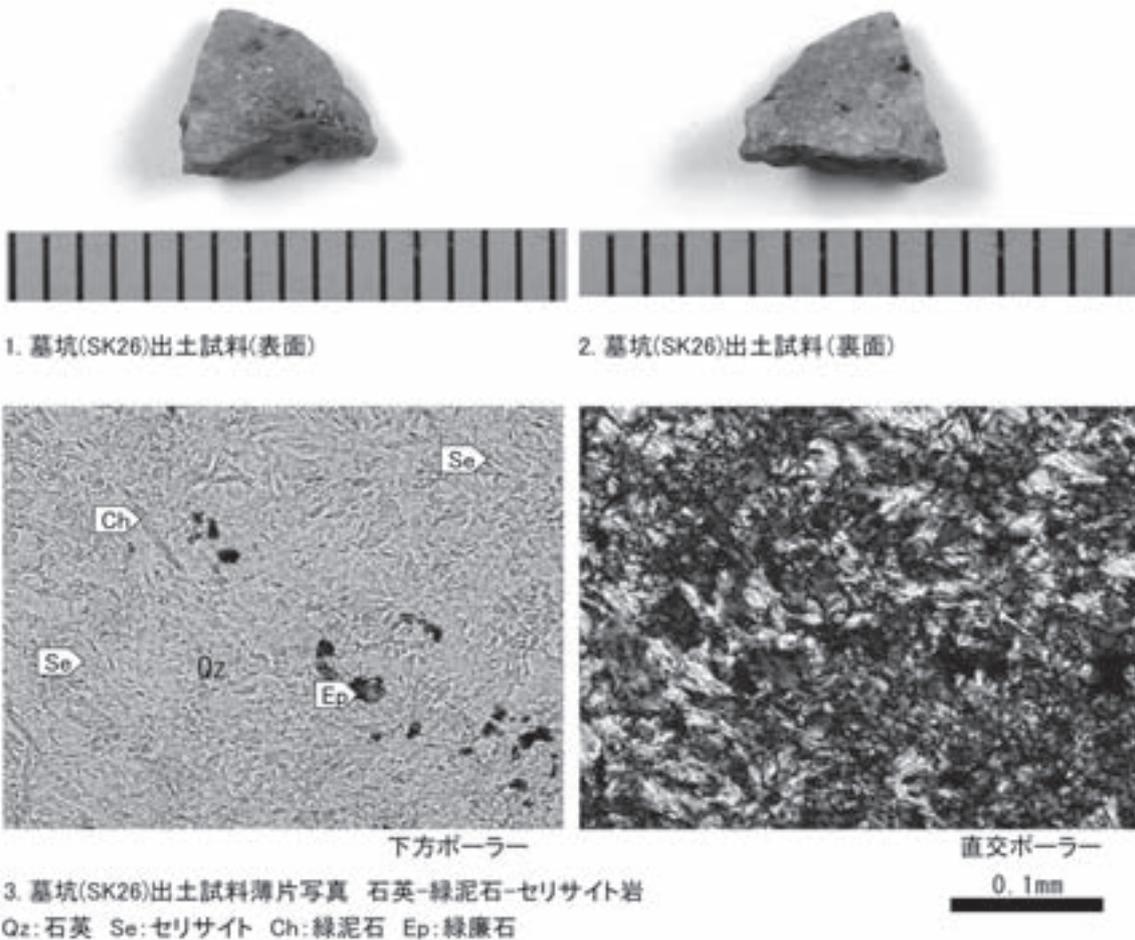
副成分鉱物

石英：微量存在し、粒径最大0.25mmの他形で不定形状を呈し、セリサイトや緑泥石の粒間を埋めて点在する。

緑簾石：きわめて微量存在し、粒径最大0.02mmの他形で不定形状を呈し、筋状に配列して分布する。

④考察

碧玉は、細粒、塊状緻密質な玉髄で、不純物を含み、各種の色調を示す。考古学の分野では、



第38図 試料および剥片

特に緑色の色調を示す玉髓または石英などのシリカ鉱物からなるものに対して碧玉の名称が使用される。その他、このようなシリカ鉱物以外にも、緑色を呈する変質凝灰岩なども碧玉とされる場合も多い。今回の分析試料は、偏光顕微鏡観察の結果、石英-緑泥石-セリサイト岩という交代岩と鑑定された。石英含有量は少ないが緑泥石、緑廉石といった緑色変質鉱物を含むことにより、緑色の色調を呈し、肉眼的に碧玉に近い岩相となっている。したがって、考古分野における碧玉に該当する石材とみなすことができる。

近畿、中国、北陸地方における碧玉および碧玉様岩の産地としては、数か所程度が知られている。弥生時代後期から古墳時代にかけて盛んに使用されていた島根県松江市花仙山を初めとして、兵庫県豊岡市の玉谷、兵庫県山南市の石戸、石川県小松市の菩薩・那谷、富山県細入村の細入、新潟県佐渡島の猿八といった原産地が現在のところ明らかとなっている(藁科, 2006)。分析試料は、シリカ鉱物からなる典型的な碧玉とは異なっており、良質な碧玉が産出する花仙山のような産地のものとは考えにくい。試料の構成鉱物である緑泥石、緑廉石、セリサイトといった変質鉱物の種類は、新第三紀中新世のいわゆるグリーンタフ地域に産出する変質交代岩と共通する特徴を有している。したがって、産地の特定は難しいものの、グリーンタフの分布する兵庫県北部や、福井県北部といった地域がまず採取地域として想定される。成分分析データなども加えて、今後検討していく必要があるだろう。

(パリノ・サーヴェイ株式会社)

引用文献

藁科哲男, 2006, 碧玉製玉類の科学的分析最新成果. 季刊考古学, 94, 100-102.

3. まとめ

今回の府道関連遺跡の調査は、発掘調査は下海印寺地区で1か所、試掘調査は樽井地区、調子地区と円明寺地区の3か所で実施した。伊賀寺地区では縄文時代の火葬墓や土壙墓、竪穴式住居跡、庄内期の竪穴式住居跡を検出した。それに対して、試掘調査の結果は、旧小泉川の氾濫源にあたっており、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

小泉川流域では、脇山遺跡、友岡遺跡、下海印寺遺跡で縄文集落が確認されており、昨年度の右京第927次調査では縄文時代中期末の集落を調査した。今回の伊賀寺遺跡では、北端の3トレンチでは縄文時代中期末の竪穴式住居跡を検出し、2トレンチ南半では縄文時代後期後半の居住域と墓域を確認した。また、火葬墓は新鮮な遺骸を焼いたものであり、従来の縄文期の火葬に対する見解とは異なるものである。これらの成果の詳細は調査の概要で述べたとおりである。

今回の右京第943次調査と平行して、周辺地では府道関連事業として右京第910・941次調査や第二外環関連調査として第947次調査が行われており、特に北東側に隣接した第右京910・941次調査では、縄文期の竪穴式住居跡や土坑、多数の遺物が出土している。昨年度に調査を実施した右京第927次調査でも縄文時代中期の竪穴式住居跡や土坑が検出されており、今回の調査地の所在する段丘上には、広範囲に縄文時代中期末、後期後半期の集落が広がっていることが分かって

きた。目を広げて、小泉川流域では、下海印寺遺跡や脇山遺跡、友岡遺跡などで縄文時代の集落跡が確認されており、今回の伊賀寺遺跡の成果は、小泉川流域における縄文社会を復元する上で、重要な知見となった。

現在、府道関連事業の右京第910・941次調査の出土遺物の整理が進められており、それらの成果と併せて今回の伊賀寺遺跡の成果を捉えていく必要があるだろう。

(岩松 保)

注1 「京都第二外環状道路関係遺跡平成15年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第113冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

注2 「京都第二外環状道路関係遺跡平成17年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第124冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007

注3 「京都第二外環状道路関係遺跡平成16年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第118冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

注4 注2に同じ

注5 京都大学片山一道・大藪由美子・泉拓良・千葉豊・富井眞、文化財研究所奈良文化財研究所松井章・丸山真央、島根大学山田康弘、大山崎町教育委員会林亨・寺嶋千春・古閑正浩、長岡京市教育委員会中尾秀正・小田桐淳・中島皆夫、長岡京市埋蔵文化財センター岩崎誠、向日市教育委員会中塚良

注6 注1に同じ

注7 「京都第二外環状道路関係遺跡平成19年度発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第131冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注8 岩松保・大藪由美子「長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について」(『京都府埋蔵文化財情報』第107号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2008

注9 注1に同じ

注10 注2に同じ

圖 版



(1) 1 トレンチ南西部全景(北西から)



(2) 1 トレンチ北東部全景(西から)



(1) 1 トレンチ 竪穴式住居跡
S H02 全景 (南東から)



(2) 1 トレンチ 竪穴式住居跡
S H05 全景 (南西から)



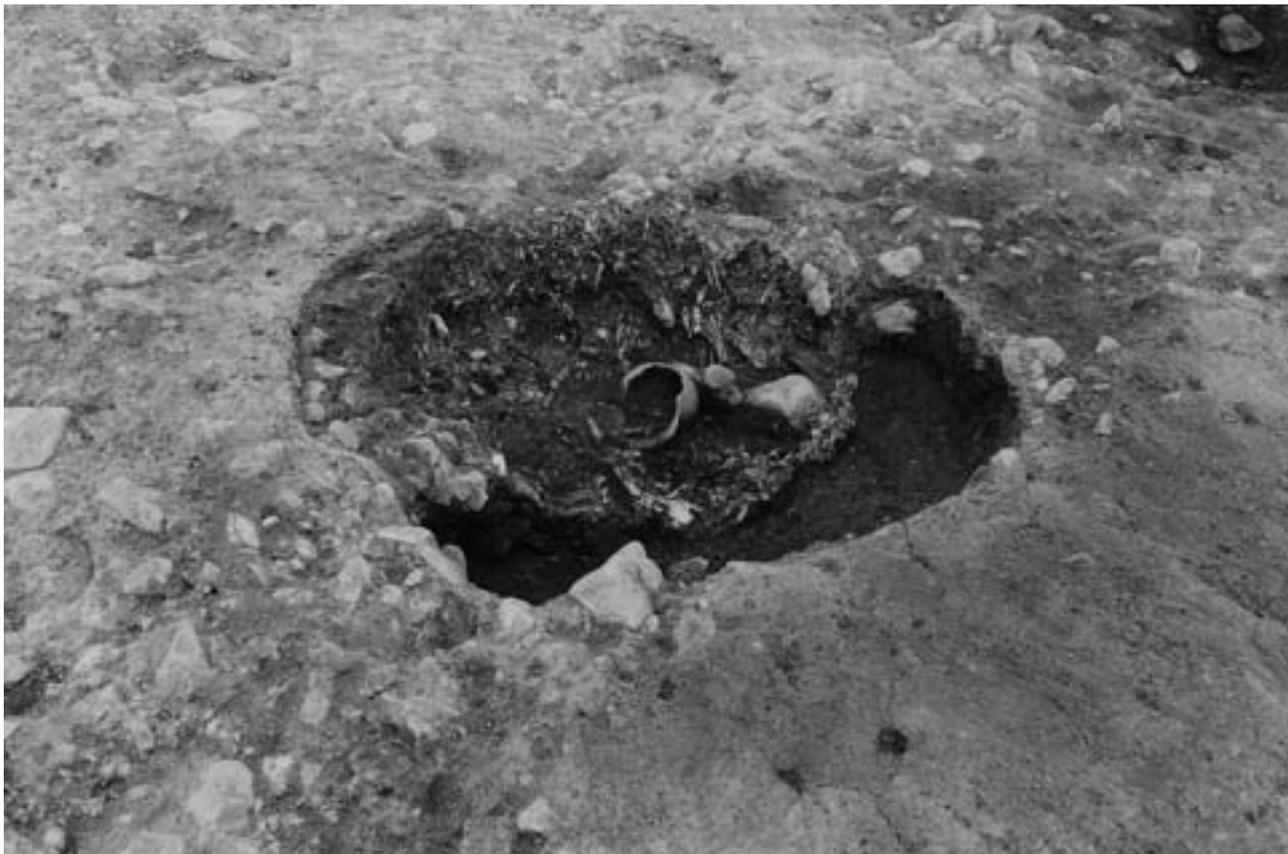
(3) 1 トレンチ 土坑 S K13 全景
(西南西から)



(1) 1～3トレンチ全景(上が北)



(2) 2トレンチ全景(南西から)



(1) 2トレンチ火葬墓S K03全景(南西から)



(2) 2トレンチ火葬墓S K03全景(上が南)

(1) 2トレンチ火葬墓S K03土層
(南西から)



(2) 2トレンチ火葬墓S K03
完掘状況全景(南東から)



(3) 2トレンチピットS P18内
遺物出土状況(東から)

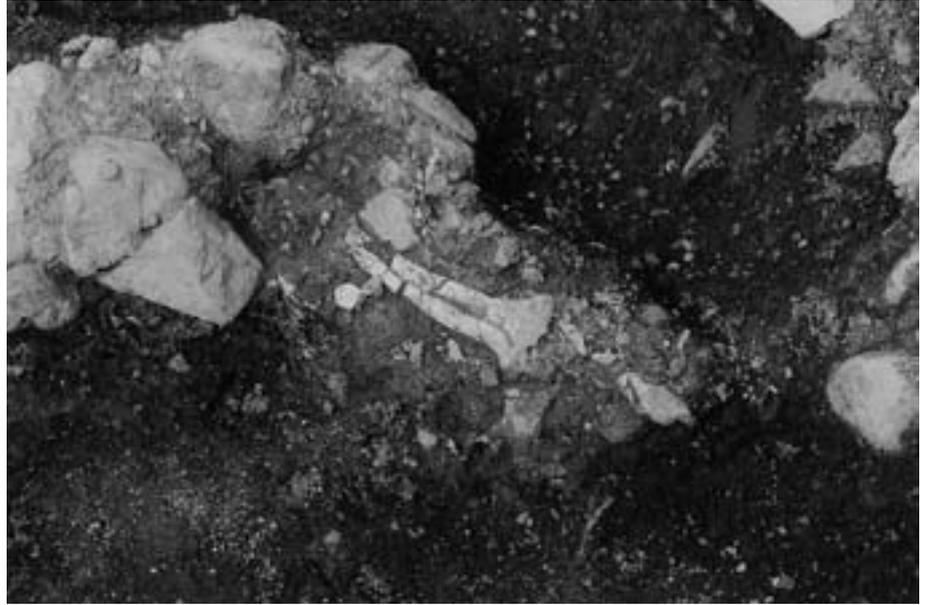




(1) 2トレンチ溝S D05全景(北から)



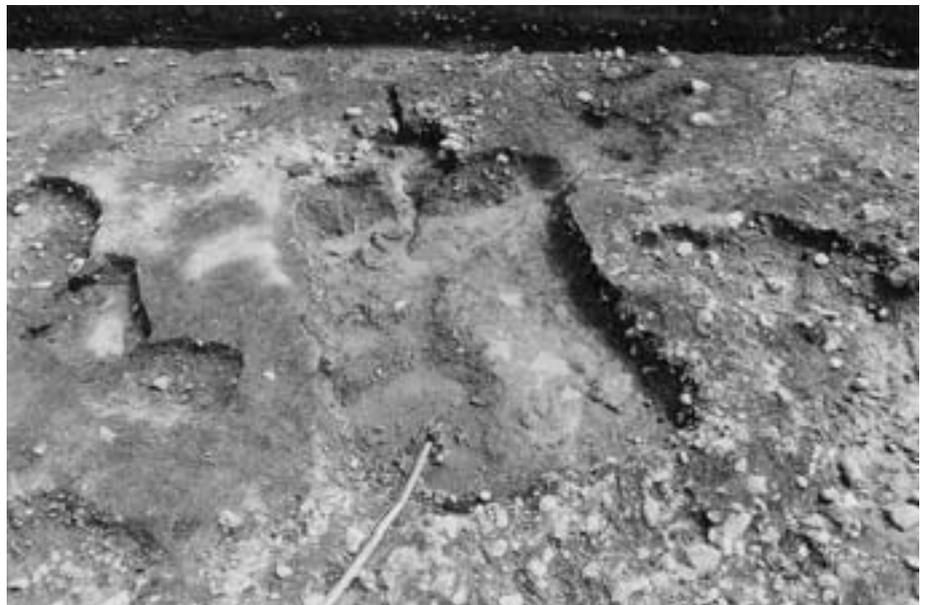
(2) 2トレンチ火葬墓S K26全景(南東から)



(1) 2トレンチ火葬墓S K26内
人骨検出状況(南西から)



(2) 2トレンチ火葬墓S K26内
人骨検出状況(北から)



(3) 2トレンチ火葬墓S K26
完掘状況(南西から)



(1) 2トレンチ竪穴式住居跡S H01全景(北西から)



(2) 2トレンチ竪穴式住居跡S H25全景(北から)



(1) 2トレンチ土坑 S K20
検出状況(北から)



(2) 2トレンチ土坑 S K20
半割状況(東から)



(3) 2トレンチ土坑 S K20
完掘状況(西から)



(1) 1 トレンチ東端部
サブトレンチ(南から)



(2) 1 トレンチ東端部
サブトレンチ内検出崖面
(南西から)



(3) 2 トレンチ崖面 S X29 全景
(東北東から)

伊賀寺地区



(1) 2 トレンチ土壙墓 S K07・06・
21・09(南から)



(2) 2 トレンチ土壙墓 S K21・09
(西から)



(3) 2 トレンチ土壙墓 S K02
(東から)



(1) 2トレンチ土壙墓 S K27
(東から)



(2) 2トレンチ土壙墓 S K19
(北から)



(3) 2トレンチ土壙墓 S K11
(西から)



(1) 3トレンチ全景(南から)



(2) 3トレンチ全景(北から)

伊賀寺地区



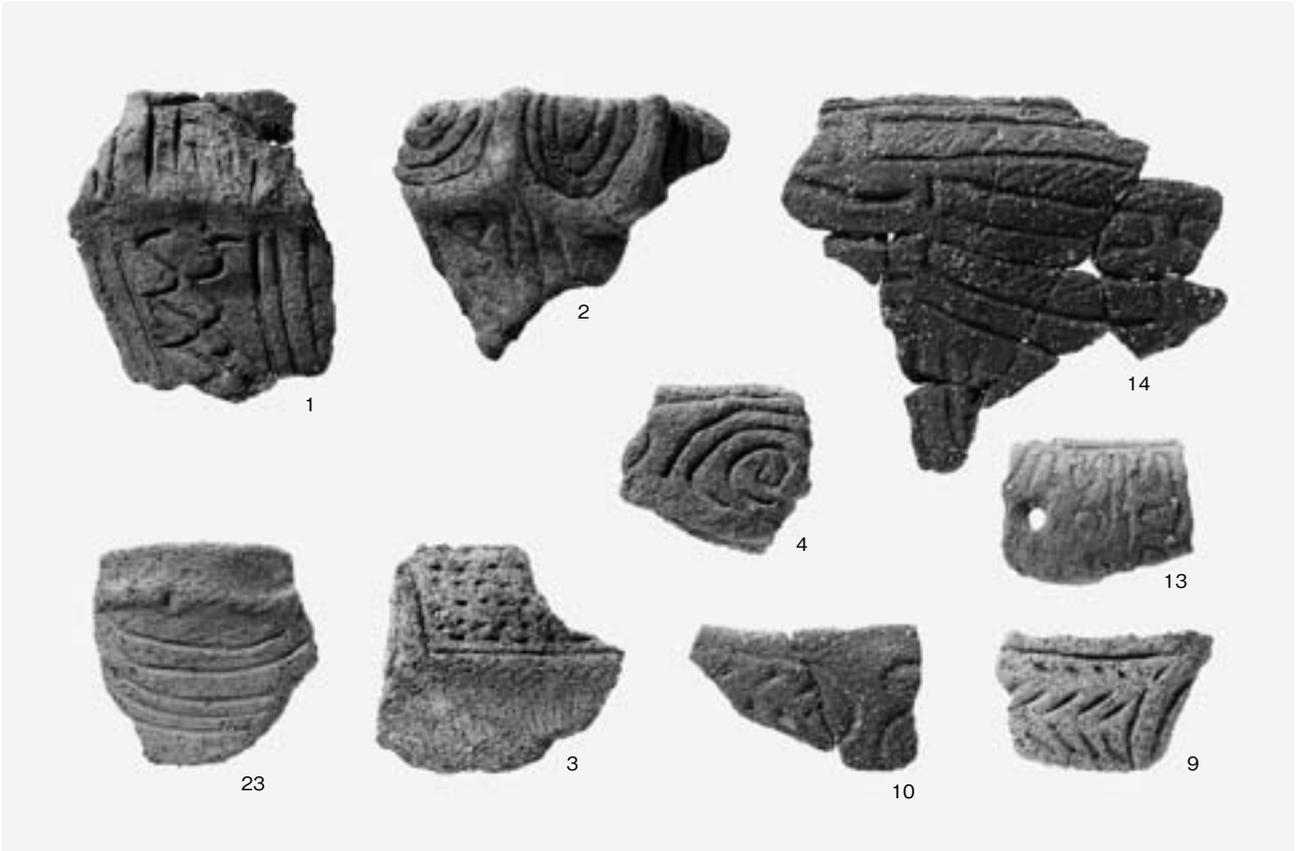
(1) 3トレンチ竪穴式住居跡
S H20全景(南東から)



(2) 3トレンチ竪穴式住居跡
S H20床面遺物出土状況
(北西から)



(3) 3トレンチ炉跡S K19
完掘状況(北東から)



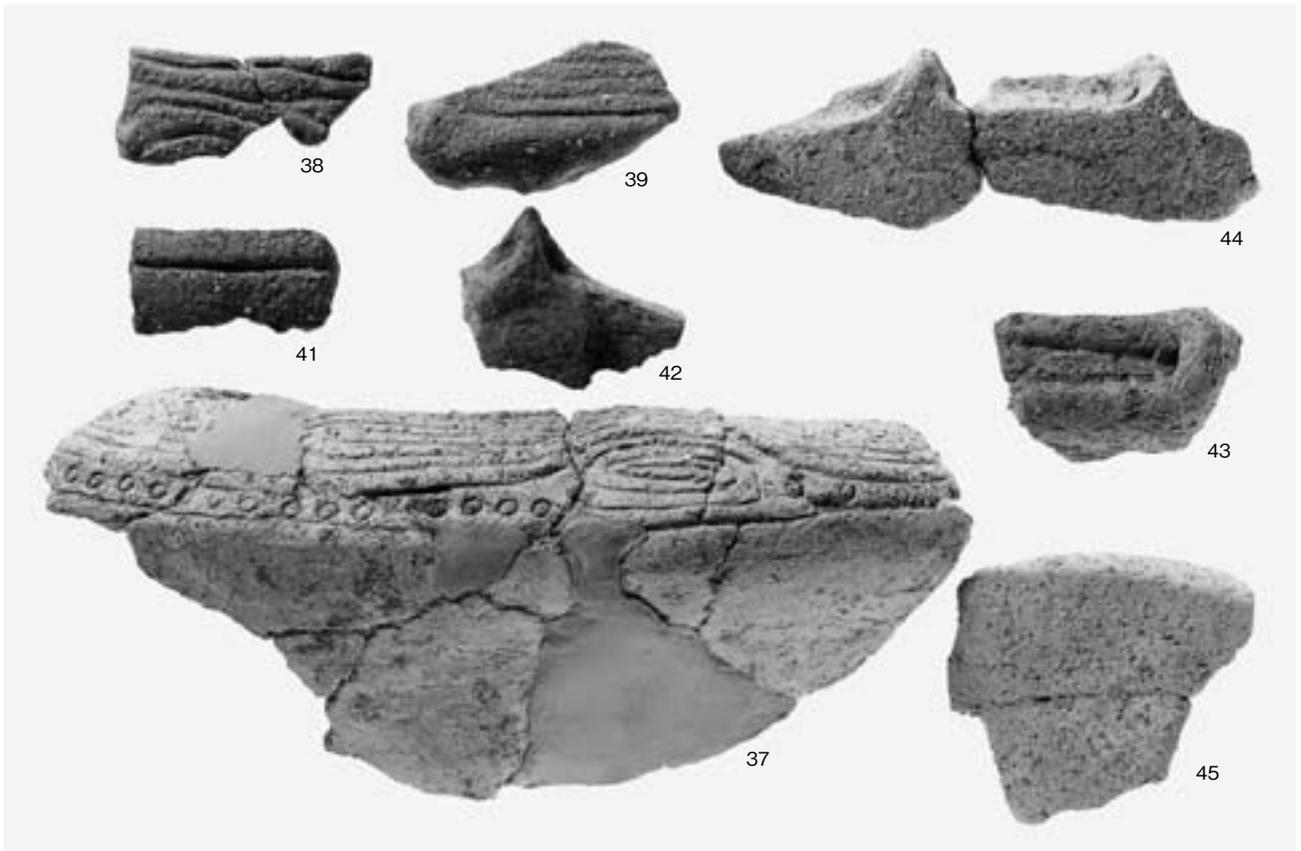
(1)出土遺物 1



(2)出土遺物 2



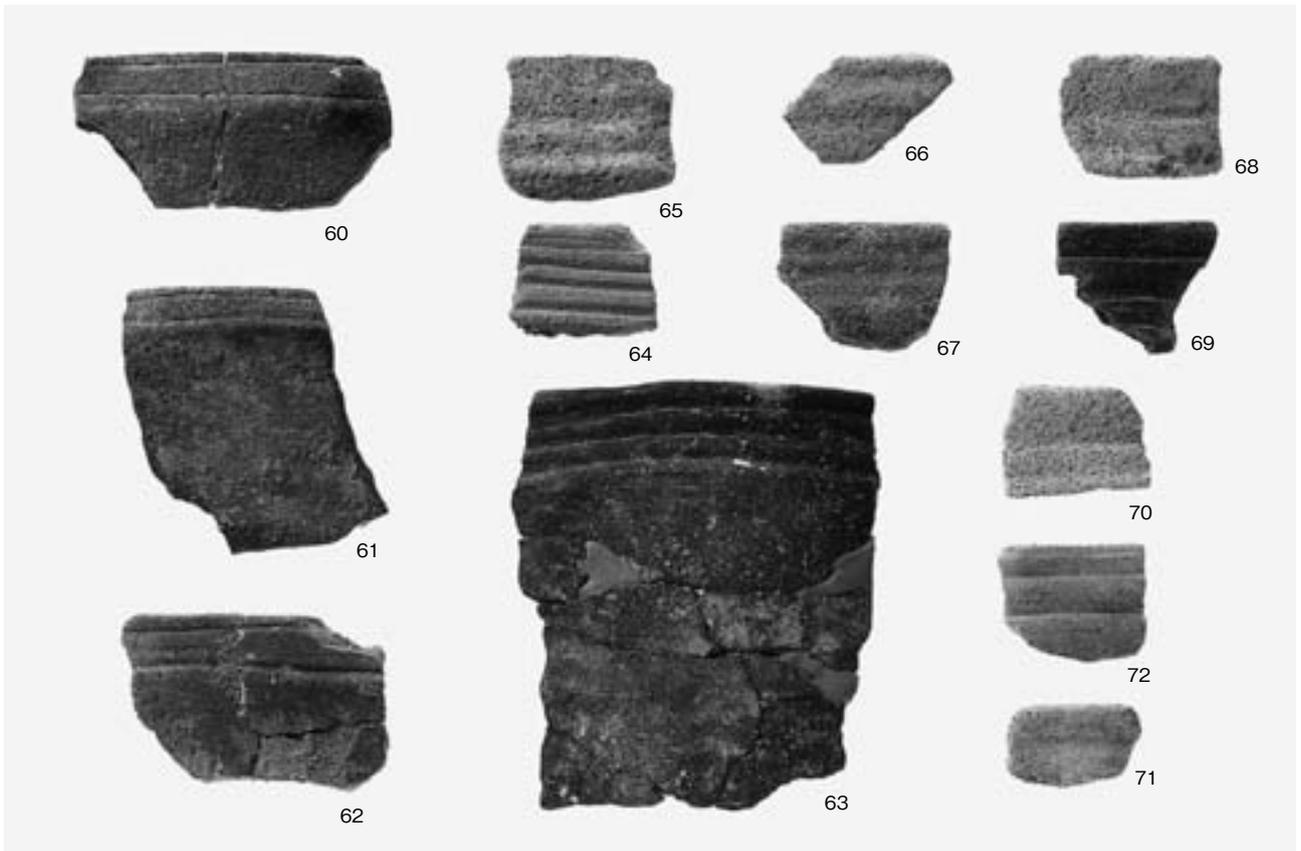
(1) 出土遺物 3



(2) 出土遺物 4



(1) 出土遺物 5



(2) 出土遺物 6



21



118



121



122



79



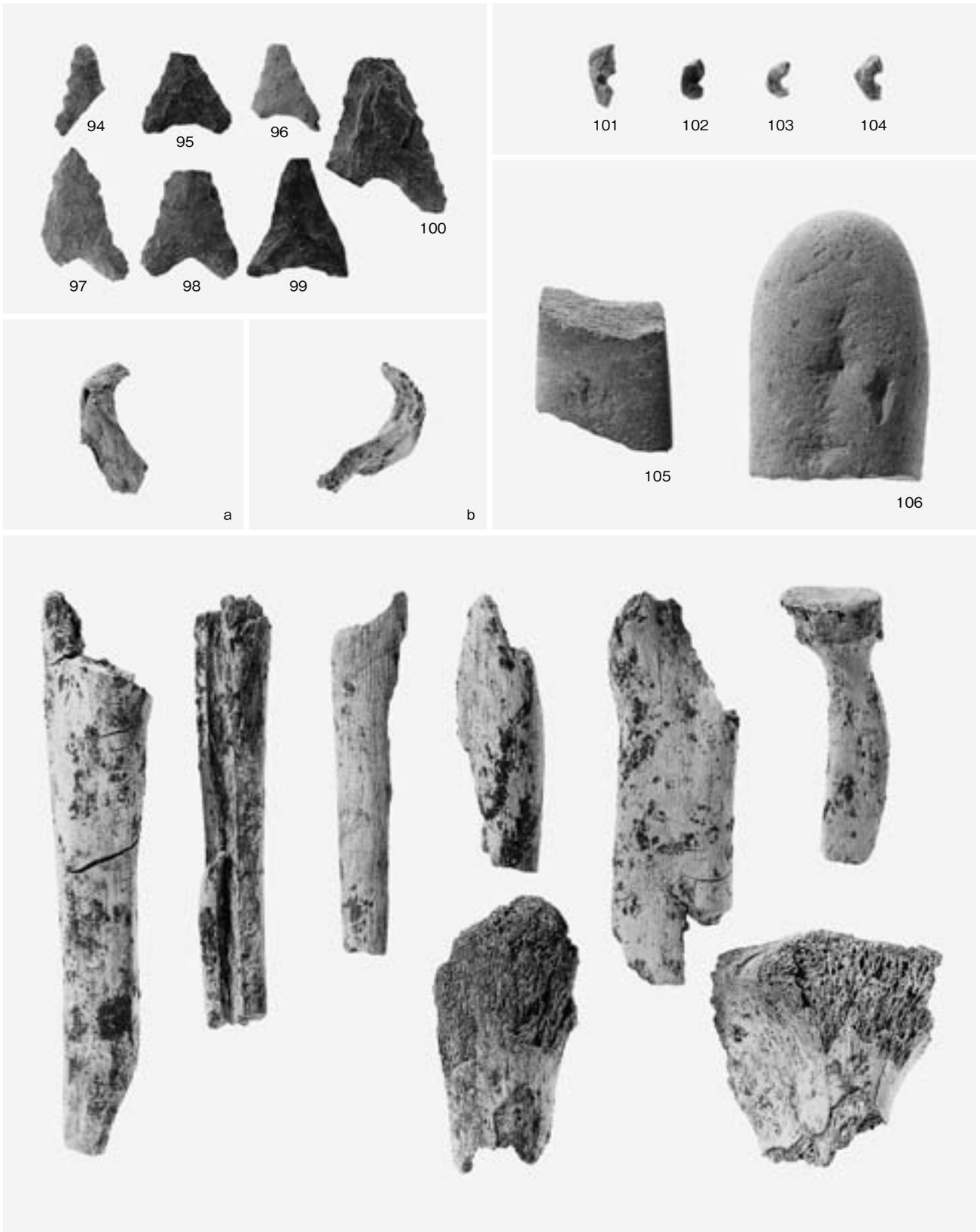
123



90



90



出土遺物 8



(1) 調査トレンチ全景(南から)



(2) 東壁土層(西から)



(1) 1 トレンチ全景(北から)



(2) 2 トレンチ全景(西から)



(3) 2 トレンチ東壁(西から)



(1)長岡京跡右京第939次・
松田遺跡2トレンチ全景
(南東から)



(2)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
1トレンチ全景(北東から)



(3)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
3トレンチ全景(南東から)



(1)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
3トレンチ東壁(西から)



(2)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
4トレンチ全景(南から)



(3)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
4トレンチ西壁(東から)



(1)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
4トレンチ南壁(北から)



(2)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
5トレンチ全景(西から)



(3)長岡京跡右京第940次・裕遺跡
出土遺物

京都府遺跡調査報告集 第133冊

平成21年 3月31日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141